

南島考古雑録 (Ⅲ)

高 宮 廣 衛

序

本シリーズは一篇の論文あるいは報告書としては分量の少ない簡単な報告や小論文、資料紹介などを数篇まとめて紹介するのが主な目的である。シリーズ (Ⅰ) では①円筒形丸底深鉢形土器、②宇和川半洞穴採集土器の類例、③暫定編年の一部修正 (以上『南島考古』第11号、1991)、シリーズ (Ⅱ) では④上クルク原貝塚の表採資料、⑤八重山考古編年の一部修正、⑥福岡県における開元通宝の出土例—特に7～12世紀遺跡を中心として (以上『沖縄国際大学文学部紀要』第20巻第2号、1996) など6項目にわたって新資料の紹介や旧見解の訂正などを行った。今回は下記5項目を取り上げたい。

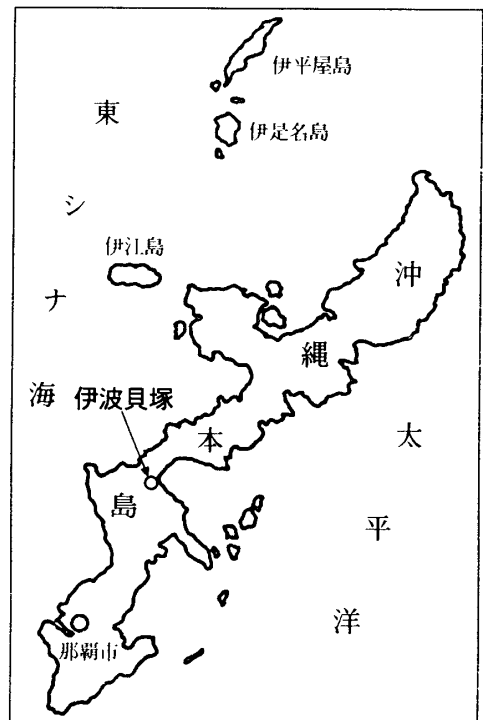
7. 伊波貝塚採集の狭刃型石斧
8. 首里城採集の高麗瓦
9. 熱田原貝塚の石器
10. 琉球先史考古学に関する新知見
11. 東中国海東縁における開元通宝の分布

(7) 伊波貝塚採集の狭刃型石斧

I) はじめに

大正9 (1920) 年の大山柏による試掘調査で全国的に著名となった伊波貝塚が、どのような地形に立地し、どれほどの規模で、現状はどうなっているのかを知りたく、昭和35 (1960) 年7月下旬のある日曜日、現地を訪れた。当時は今日と違って交通の便が甚だ悪く、バスが唯一の交通手段だった時代である。埃の舞い上がる未舗装のデコボコ道をバスに揺られながら、那覇から2時間近くかかってたどり着いた記憶がある。

本貝塚は琉球石灰岩丘陵の北面崖下に広がる傾斜面の下端部に形成されている。この斜面一帯は当時、ススキやカヤなどの雑草が生い茂る原野で、ところどころに琉球松が生えていた。貝塚の立地する斜面最下端部は垂直に近い状態に削り取られ、50～100mほどの削壁ができ、それ以北 (民家側) は平坦な畑地になっていた。削り取られたあとの削壁部や付近の畑地に土器などの小破片が散っていたが、散布量が少なく良好な資料は望める状態になかった。削壁面に遺物包含層は見受けられなかった。当時、この削壁部の100m近くまで民家が迫っていた。ここに紹介する石斧は削壁面に隣接する畑地で採集したものである。したがって、縄文後期に属する可能性が高い。



第1図 伊波貝塚の位置

II) 採集石斧の形態及び製法

採集石斧のサイズおよび石質等は下記の通りである (第2図)。

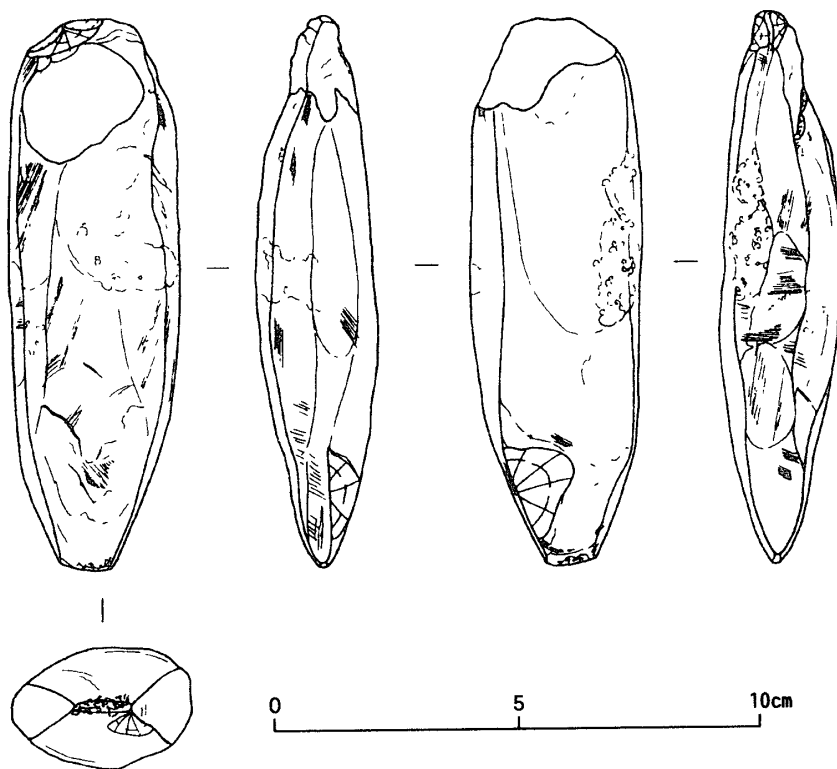
- ① 長さ=11.1cm ② 最大幅=3.3cm ③ 刃部の幅=1.2cm
④ 厚さ= 2.5cm ⑤ 重量=155.0g ⑥ 石質=輝緑岩

ここに紹介する資料は上記のように小型の狭刃型石斧である。平面形は両側縁がほぼ平行する短冊形に近いが、厳密には基部の近くに最大幅があり、基部の方へ若干幅を減ずるとともに、他方刃部方向へも徐々に幅を狭め、下方1/4の箇所ところで急に幅を縮め狭刃的刃形を形成する。平面形は左端の平面図で見ると、左の側面がやや真っ直ぐで、右の側縁は弓状の軽い彎曲を示す。また、左の側縁中央部にはごく浅い凹部があり、図では分かりにくいですが、指を触れると感知出来る。

横断面は丸みのある不整の方形で、縦断面は中央部が最も厚く、両端へ厚さを減ずるためいわゆるレンズ状を呈するが、どちらかといえば上面は弓状の彎曲を示し、背面は「く」の字状の弱い屈曲を示す。したがって、上面がやや丸みを帯びるのに対し、背面は中央部から頭部の間はやや平坦、他方、刃部側は軽い彎曲を示す。

製法は器面を打欠調整後、研磨を加えている。部分的に敲打痕も見受けられるが、限られている。上面は頭部と刃部の両方に剥離調整痕が消えきらずに残っている。研磨は中央部から刃部に向かって丁寧で、基部の方はややラフである。側面は両側面とも比較的よく研磨されている。裏面(背面)は刃部側の約1/3がよく研磨されているものの、他は基部まで自然面を残す。刃部には整形後に一部欠けた部分があり、基部には剥離調整痕も見受けられる。

刃部は全縁わずかに欠け、鋭利さはない。刃縁は正面から見ると水平方向に直線的で、表面の一部に垂直方向の使用痕がわずかに残る。両刃である。



第2図 伊波貝塚採集の狭刃型石斧

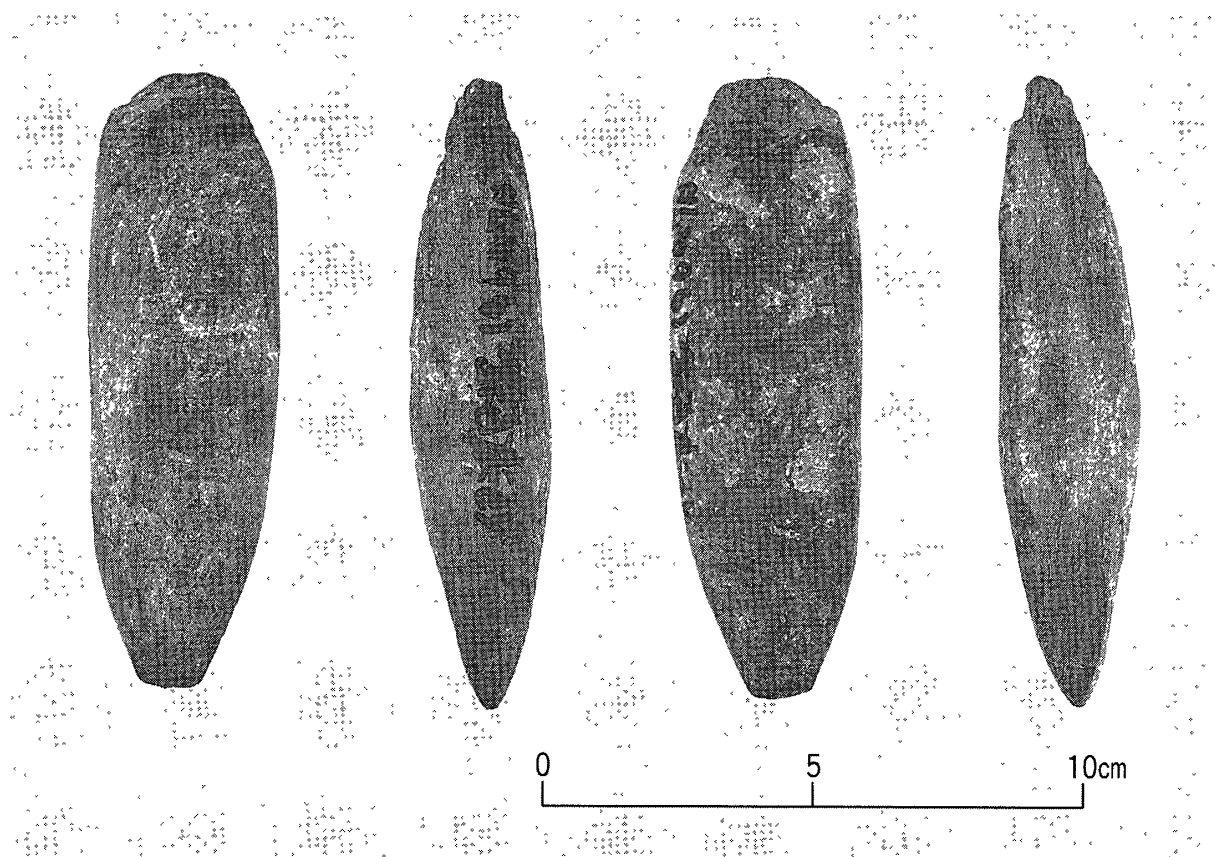
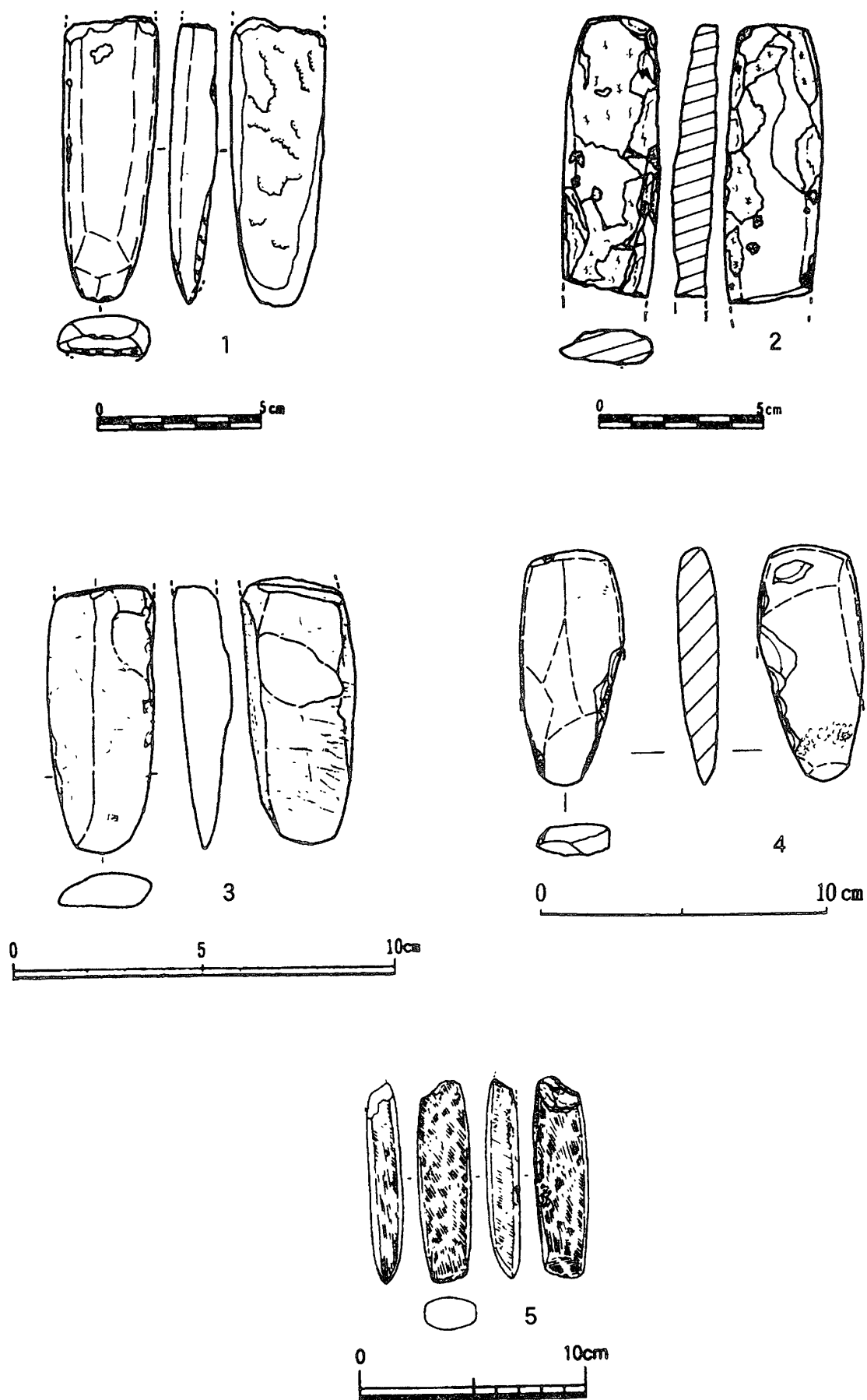


写真1 伊波貝塚採集の狭刃型石斧

この石斧が付柄使用か否か明言は出来ないが、一応両方の可能性が考えられ、現時点で一つに絞ることは困難である。つまり、柄を付けずに直に手に握って使用する場合と、柄を付けて使用する場合とである。後者の場合も可能性としては数種の方法が考えられる（註1）。まず、鑿とした場合、ソケット状の真っ直ぐな柄を石斧に垂直の方向に取り付け使用することができ、また、手斧であれば先端がV字状をなす柄に緊縛して使用することも可能である。後者の場合、本標品の背面に見られる自然面の部分は先述のように中央部から頭部にかけてやや平坦になっており、また、左の側面中央部には浅い凹みがあって、凹みの下端部（自然面の残る部分）はわずかに敲打調整され、緊縛用の条件は整っているように見受けられる。したがって、素手で柄を付けずに使用することも、また棒状のソケット柄やV字状の先端を有する柄に取り付けて使用することも可能だったと見ている。

次に、この石斧の用途であるが、この石斧の有する特殊な刃部形態から伐採用とは考えにくく、おそらく加工具であろう。刃部に見られる垂直方向の使用痕から鑿などの用途が想定される。この場合、何を加工したのかという問題があるが、木工具のほか貝製品、骨製品などの製作・加工に使用した可能性も考えられる。もし、日常的な木工具であれば、この種の石斧が同期の各遺跡で一定程度の比率で出土してもいいはずだが、現在のところ、散発的に数遺跡で出土しているに過ぎない。このような出土頻度からすると、ある特殊な用途に使用された可能性が推測される。大山柏の報告書（註2）によると、本貝塚から骨牙製品が15点、貝製品が45点、貝類雑器とされるものが46点出土している。伊波貝塚は多彩な貝製品の出土で知られている。このような状況から貝製品や骨製品の製作加工に関わる器具のようにも思え、報告書に図示された貝製品や骨製品を検討してみたが、現状では必ずしもこの種の加工具を必要とするようには受け取れなかった。この狭刃型石斧の対象物が何であったか、今後の資料の蓄積を待って再考したい。



第3図 類例資料 1. 室川貝塚中央区、2. 室川貝塚中央区、3. 室川貝塚東地区、
4. 地荒原貝塚 (17区)、5. 伊是名貝塚 (C区貝ブロック)

Ⅲ) 沖縄諸島出土の類例

狭刃型石斧の出土例は沖縄諸島ではきわめて少ない。数遺跡で報告されているものの、形態や製法がまちまちで、狭刃型という大枠を除けば、未だその特徴を一般化できる段階にない。したがって、ここでは類例を簡単に紹介するに止めたい。沖縄本島と属島の両地域で出土している。

まず、沖縄本島の室川貝塚例から見ていくことにしよう。1979年と1993年度の報告書に紹介されている。前者には2例の掲載があり、そのうちの1点は上半部を欠く半欠品である（第3図1）。残存部は胴上部から刃部へ向かって次第に横幅の狭まる細長のタイプで、横断面は楕円に近く、伊波例に近似の形態を有する。背面は欠落したままの状態で放置され、上面および両側面は丁寧に研磨されている。両刃石斧で、刃縁は弧状を呈し、今でも鋭い刃が残っている。千枚岩質輝緑岩製で、大山式以後の時期が想定されている（註3）。他の1点は逆に刃部の欠落した粗雑な磨製石斧である（同図2）。断面はやや扁平の細長のタイプで、刃部を欠くため刃形は不明だが、残存部から推定できる器形は狭刃型で、前者と同じ層からの出土である（註3）。

室川貝塚の1993年度の報告書にも1例記載されている（註4）。石ノミとして報告された4点の中の1点で、基部を欠く胴下半部の資料である（同図3）。残存部の平面形は胴上部から刃部へ向けて徐々に幅を減ずるタイプで、刃形は円刃に近い。全体的に細長いタイプで、平面の一つは全体的に研磨されているが、他の面は刃部のみの研磨である。緑色千枚岩製で、伊波・荻堂式に伴う可能性が指摘されている。

地荒原貝塚例（同図4）は元来平面が楕円形の石斧であつたらしいが、破損後の再利用の際、整形し直したもののようである。胴中央部から刃部へ向けて急に幅を狭める刃形を有し、刃部が弧状を呈する片刃石斧である。前記の室川貝塚例に比べると若干ずんぐりした印象を受ける。最下層の第Ⅲ層30～50センチレベルからの出土（註5）。この石斧がどの土器に伴うかは明示されていないが、報告書によると縄文後期の面縄前庭式から晩期の宇佐浜式まであり、その中では室川式が圧倒的に多いという。現時点でこの石斧の明確な時期比定は困難だが、上記の土器所見から、一応、後期の所産と見ておこう。

伊是名貝塚でも1例報告がある（註6）。同図5に示すもので、長さ8.9cm、最大幅は2.4cm、厚さ1.5cm、重さ54.7gの細長いタイプで、中央部に最大幅があり、上下両端へゆるやかに幅を減ずる。刃部は扁刃で、黒色千枚岩製。両刃の定角式石斧である。C区貝ブロックの出土で、この貝ブロックは大量の土器を伴う。この貝ブロックは報告書21頁の図2-1-3の基本層序によると、2-2層で、この層は第4期に属し、第4期は「時期設定」の項によると伊波・荻堂式の時期である。つまり、伊波・荻堂期の所産と見ることができる。

以上、3遺跡出土の類例を紹介した。伊波貝塚例と完全に一致する例は見受けられないが、器形が全体的に細長く、かつ、両刃という点からすると、同図1の室川例と伊是名貝塚例（同図5）が形態的には近いという印象を受ける。以上の諸例から縄文後期に出現するらしいことが分かってきた。狭刃型石斧は八重山諸島に一般的で、そこでは数種のサブ・タイプが知られている。また、八重山タイプとは平面形や断面形が異なるものの、巨視的に見て狭刃型に含め得る資料は台湾（註7・8）やフィリピン、その他太平洋諸島（註9、10、11、12）に多い。八重山型狭刃石斧の源流は未だおさえられていない。しかし、おそらく上記のような分布状況から見て南方起源であろう。沖縄諸島出土の前記諸例が八重山タイプに結びつくかということ、現段階では否定的である。九州との関係については、現在のところ不明だが、今後チェックしてみたいと考えている。

IV) おわりに

以上、伊波貝塚採集の狭刃型石斧と類例遺跡の資料を簡単に紹介した。本標品の有する特殊な刃部形態からノミ的用法が考えられるが、要は対象物が何であったか重要な問題だが、今回は特定できなかった。可能性としては木工用のほか貝器、骨器などの製作、加工具としての用途がまず思い浮かぶ。木工用とすると、どの遺跡でも木製品の製作や家屋の建築などに必要なわけで、この観点に立つと同期の各遺跡で他の石斧と同様に一定程度の出土があつてしかるべきだが、現在のところ、このような状況は確認できない。むしろ、狭刃型石斧の稀少性からすると、特殊の用途が付与されていた可能性が高い。そこで、後者の貝製品あるいは骨製品専用の加工具ではなかろうかと検討してみたが、未だ十分納得のいく説明が出来ない。伊波例の刃縁に残る垂直方向の使用痕からすると、切截専用とも思えない。今回は資料不足もあつて十分吟味できなかったが、資料の蓄積を待って、再度検討してみたいと考えている。

なお、石質の同定を石川高等学校校長の大城逸朗博士にお願いし、実測図は知念村教育委員会の大城秀子さんが引き受けて下さった。記して感謝申し上げたい。(2000, 2, 10脱稿)

【註】

1. 佐原 真 『斧の文化史』東京大学出版会、1994
2. 大山 柏 『琉球伊波貝塚発掘報告』大正11 (1922)
3. 沖縄市文化財調査報告書 第1集、『室川貝塚』沖縄市教育委員会、1979
4. 沖縄市文化財調査報告書 第17集、『室川貝塚』沖縄市教育委員会、1993
5. 『地荒原貝塚』 具志川市教育委員会 1986
6. 小田静夫「伊是名貝塚の石器」『伊是名貝塚』勉誠出版(株)、2001
7. 高宮廣衛・宋文薫「台湾台東県麻竹嶺遺跡採集の狭刃型石斧2例」『南島文化』第21号、
沖縄国際大学南島文化研究所、1999
8. TSANG, Cheng-hwa "ARCHAEOLOGY OF THE PENG-HU ISLANDS" Special Publications,
Number 95, Institute of History and Philology Academia Sinica, 1992
9. DUFF, Roger "STONE ADZES OF SOUTHEAST ASIA" Canterbury Museum, Bulletin
No. 3, Canterbury Museum Trust Board, 1970
10. THOMPSON, L.M. "ARCHAEOLOGY OF THE MARIANAS ISLANDS" Bernice P. Bishop
Museum Bulletin 100, Kraus Reprint CO. 1971
11. TAKAYAMA, Jun and EGAMI, Tomoko "ARCHAEOLOGY ON ROTA IN THE MARIANAS
ISLANDS" Tokai University, 1971
12. 江上幹幸「サイパン島の石製工具について」『物質文化』22号、1973

(8) 首里城跡採集の高麗瓦片

I) はじめに

琉球大学は今次大戦で壊滅した旧首里城の跡地をキャンパスとして1950年5月22日に開学した。そして、昨年(2000)、めでたく創立50周年を迎えた。筆者は開学の年に英文学科二年次に編入を許可されたが、米国留学の試験にパスしたため、一年間在籍しただけで中途退学した。帰国後、所用があって何回か琉大を訪れる機会があり、その都度、遺物が地表に散っていないか関心をもって地表観察を行ったが、キャンパス内は植樹が進み、広場には芝が張られ、道路は舗装されていて地表調査には不向きの状態であった。ただ、志喜屋図書館(写真)に隣接する城壁北面の一部は第二次世界大戦によって崩落したままの状態で放置され、付近には瓦や陶磁器などの破片が散乱していた。その崩壊面に沿って、下の道路から頂部のキャンパス内に通ずる細い獣道のような通路が一本斜めに走っており、キャンパス内への唯一の近道とあって、当時、教職員や学生の多くがこの小道を利用していた。

1965年3月24日、志喜屋図書館に用があって、この小道を上りかけたところ、足元に文字らしきものを刻んだ灰色の瓦片が崩壊面から顔をのぞかせていた。取り上げてみると、高麗瓦の破片であった。伊波普猷が明治40年、浦添城跡で初めて発見、そして翌41年、琉球新報に報告して以来(註1)、ごく最近まで数例しか知られていなかった、いわば幻の刻銘瓦である。夢ではないか何度も確かめ、間違いないと分かると、手が震えてきた。持ち帰って早速、発見年月日を瓦の側面に記入した。この資料は実測図の作成・写真撮影のあと公共機関に移す予定でいたが、その後、作業がずっと停滞したままになっていた。

ところで、1975年、隣家の火事で拙宅が類焼にあい、多くの遺物を失ったが、焼け跡から無事この瓦を回収できたのは不幸中の幸いであった。写真2がこの高麗瓦で、凹面の一部と側面が煤けているのはそのためである。なお、本資料は現在、沖縄国際大学文学部考古学研究室に保管されている。

II) 首里城採集の高麗瓦

本標品は銘文の一部を含む平瓦の破片で、現存部の最大長13.3cm、最大幅は凹面が約8cm、凸面が約9cm、厚さは2cm前後である。

凸面中央の銘文の部分は細い隆線によって上下ともやや横長の方形に区画され、また、内部も同じ隆

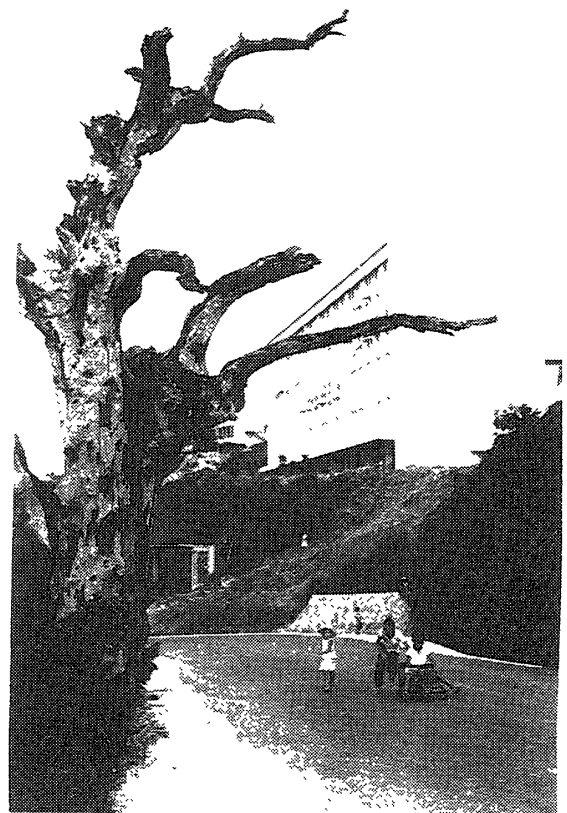
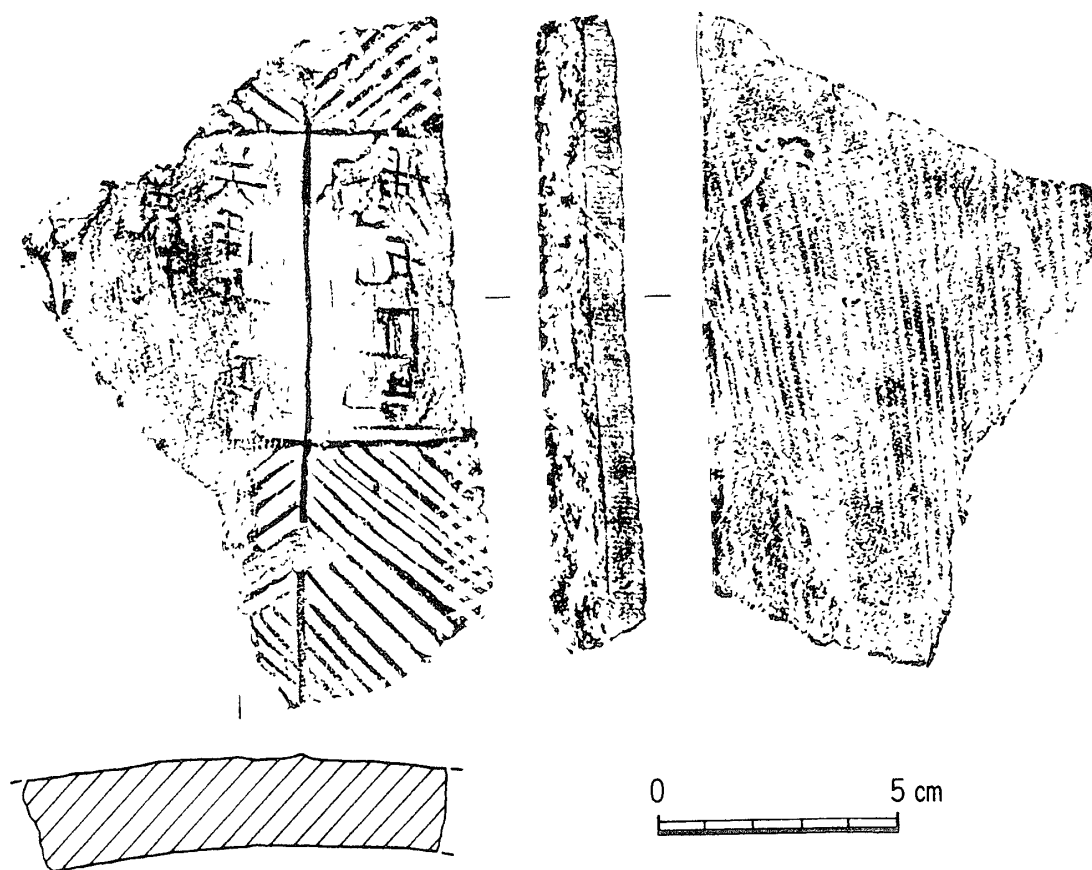


写真1 1960年代の琉大図書館



第1図 首里城採集の高麗瓦

線によって左右に二分されている。左側の区画内に「癸酉年高」の4文字、右側の区画に「麗瓦匠造」の4文字が陽刻されている。また、左側の「癸酉年高」の左方上部にも文字らしきものが見受けられ、「麗」の字にも見えるが、判読できない。銘文全体は右文字で刻まれ、瓦ではその反対に表れている。

左側の「癸酉年高」の部分は、印刻後に消された形跡があり、文字の部分は左上から右下に向かって不明瞭になっている。この文字不明瞭の部分には左上から右下へ向かって明瞭な過擦痕が見受けられ、過擦痕はさらに銘文の区画を越えて下方の羽状文帯に及んでいる（写真2）。この過擦痕が何によるものか、指以外のものであることは確かだが、現在のところ器具の特定は困難である。また、どういう目的でこのような過擦が行われたのか、故意か、それとも作業の過程で偶然に起こったものなのかははっきりしないが、銘文の性格を考えると、わざわざ消す必要は毛頭なく、後者の可能性が高い。右側の「麗瓦匠造」銘文部分に前述のような過擦痕は認められない。同部のスタンプは押圧が弱いものの、文字は何とか判読可能である。

銘文上下の部分に施された羽状打捺文は明瞭である。羽状打捺文の一部には反対方向から施された別の斜沈線（羽状文）で切られた箇所もある。裏面では布目圧痕が認められ、また、明瞭な糸切り痕が斜め方向に施されている。布目圧痕は凹面のほぼ全面に認められるが、本標品の中央部が最も明瞭で、その部分では条痕は見えかかっている。同部の周辺では糸切り痕の上に布目圧痕が見受けられ、したがって、両者の前後関係も明瞭である。

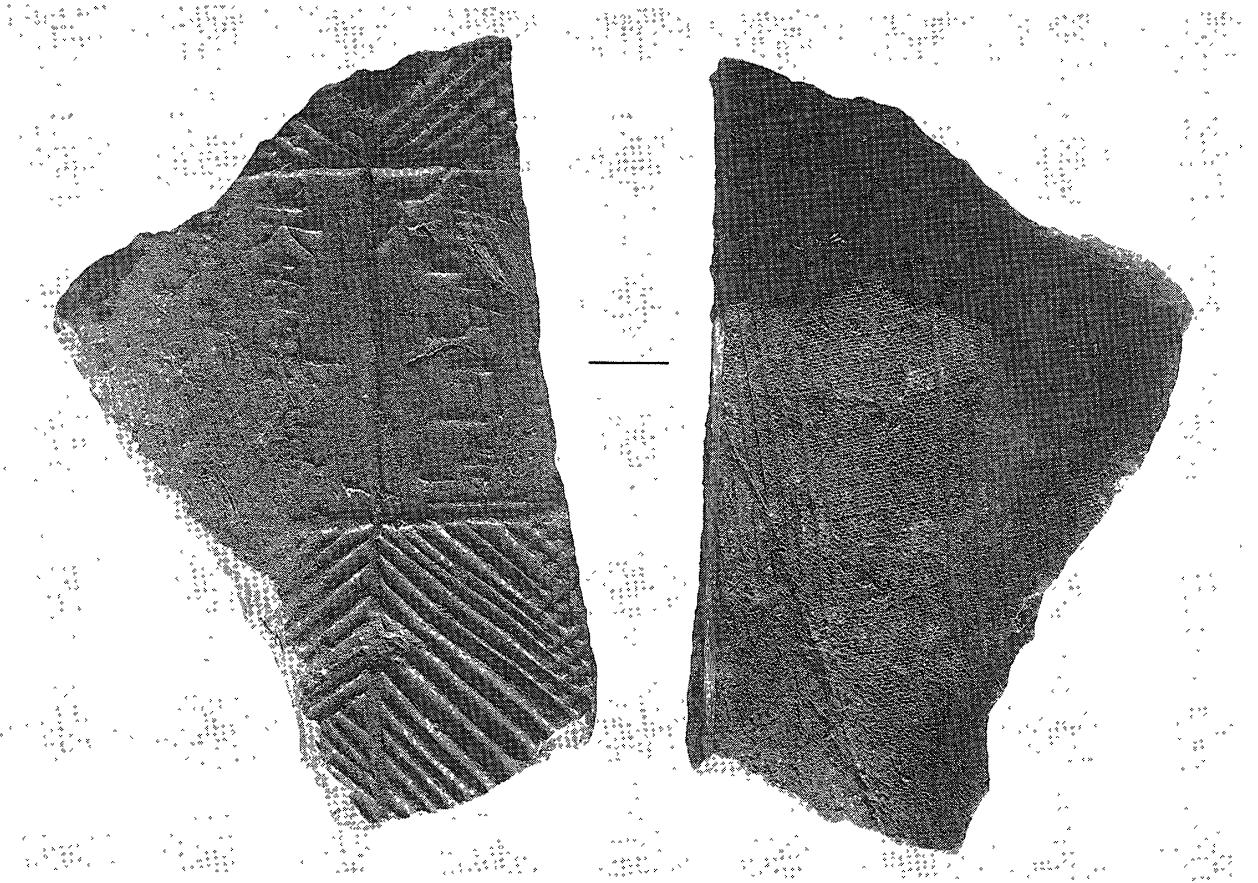


写真2 首里城採集の高麗瓦

本標品の右端側面（第1図）には凹面から切り込みを入れ、そのあと割取った痕跡が残されている。切り込みは側面で見ると、中央部近くに達している。色調は灰色で、焼成はよく堅緻。胎土には雲母状の微粒子も稀に見受けられる。

高麗瓦の製作年代については、銘文の「癸酉年」から1153年説（註2）、1273年説（註3）、1393年説（註4）などが提示されている。しかし、近年の上原静氏の研究から、1333年説に落ち着く可能性が高い（註5）。

さて、次に首里城跡から出土したその後の高麗系瓦について簡記しておきたい。

首里城では昭和47（1972）年における歓会門、久慶門などの整備調査以来、昭和63年度には御庭跡、北殿や南殿跡における遺構調査、平成元年度に奉門跡、平成6年度に京の内地区などで諸調査が実施され、現在も赤田御門前庭部や御内原地区などにおいて発掘調査が継続中である。以上の諸調査によって数々の貴重な遺物が出土した。例えば、京の内地区の倉庫跡から出土した518点の遺物は一括して国によって「重要文化財」に指定されている。これらは陶磁器類が中心だが、中には金属器やガラス製品も含まれている。すべて逸品である。首里城跡はグスク等資産群の一つとして、2000年11月に世界遺産に登録された。

本城跡出土の遺物は多種多様で、その中に多数の古瓦が含まれている。古瓦は高麗系、大和系、明朝系からなり、後者の明朝系瓦が圧倒的に多いという。ここでは標題との関係で高麗系だけを取り上げることにする。第1表は上原静氏が作成した出土表で、1999年現在の資料である。

表1表 首里城跡出土の瓦集計表（1999年現在）

		歓会門地区	西ノアザナ地区	北殿跡	南殿跡	京の内地区	計
高麗系瓦	軒丸瓦		3	6	1	23	33
	軒平瓦		15	10		17	42
	平瓦	42 (3)	618 (170)	627 (一)	44 (一)	3756 (250)	5087
	丸瓦	7	100	364	2	883	1356
	有段式平瓦		3			8	11
	鬼瓦		2				2
	計	49	741	1007	47	4687	6531
大和系瓦	軒丸瓦			1		7	8
	軒平瓦		4	5	1	5	15
	雁振瓦		4	24	2	15	45
	平瓦	3	192	345	75	1284	1899
	丸瓦	9	21	26	26	571	653
	鬼瓦					2	2
	計	12	221	401	104	1884	2622
合 計		61	962	1408	151	6571	9153

※（ ）内は癸酉銘瓦

第1表によると5地点で6531点の高麗瓦が出土している。そのうち平瓦は5087点である。平瓦の欄における（ ）内の数字は高麗瓦匠造の銘文瓦である。北殿と南殿は資料整理中のため高麗銘瓦の出土数は明記されていないが、他の3地区の出土例から見て、かなりの数、含まれているものと推察される。西のアザナ地区及び京の内地区とも銘文瓦は1割に近い数字である。

第1表から分かるように、高麗銘瓦は今日では資料も豊富で、いろいろの特徴が分かりかけてきており、かつてのような希有な存在ではなくなった。したがって、筆者採集の資料も今となっては類例を1点追加するという程度の資料価値しかないが、上原静氏によると、この破片は相対的に大きく、そのため銘文部の残存率が比較的良好という。筆者採集の資料が高麗系瓦の研究に些かでも資することがあれば幸いである。

Ⅲ) おわりに

沖縄出土の高麗系瓦については、上原静氏（註6）や下地安廣氏（註7）らによる詳細な研究がある。また、「癸酉年」の実年代については上原静氏の研究により、1333年に落ち着く可能性が高まっている。しかし、この瓦の来歴が未だつまびらかでない。沖縄諸島出土の高麗系瓦のルーツが韓半島に求められることに異議を唱える研究者はいないが、韓半島のどの地域に故地があるのか具体的なことは未だ何も分かっていない。済州島に類例があるとの報告もあり、また、近年韓半島南部の島で類例を見たという情報もあって（註8）、近い将来、ルーツが解明されるのではなかろう

か、今後の調査に期待している。

ルーツの問題に関しては沖縄側も韓国における古窯跡と古瓦の具体的研究に着手する段階に来ており、将来的には北朝鮮も含めた朝鮮半島全域を対象とした研究が必要だが、他方、高麗系瓦の様子が全く不明の九州地方も当面視野に入れながら調査研究を進めていく必要があるだろう。

本文を草するにあたり、沖縄国際大学専任講師の上原静氏から有意義なご助言をいただいた。また、写真や実測図も同氏の手になるものである。記して心から感謝申し上げたい。

(2000, 12, 25脱稿)

【註】

1. 伊波普猷 「土塊石片録」『古琉球』第4版、琉球新報社、1965
2. 田辺泰・巖谷不二雄共著『琉球建築』座右宝刊行会、1937
3. 伊東忠太・鎌倉芳太郎共著『南島古陶瓷』 1937
4. 三島格 「琉球の高麗瓦など」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』 1980
5. 上原静 「シンポジウム」『アジアの中の沖縄』第9回アジア史学会（沖縄大会）実行委員会、那覇、2000
6. 上原静 「首里城跡の高麗系瓦・大和系瓦」『沖縄県教育庁文化課紀要』第12号、1986
7. 下地安廣 「高麗系瓦の製作技法考察（1）」『南島考古』第10号、沖縄考古学会、1986
8. 上原静氏のご教示による。

(9) 知念村熱田原貝塚の石器

I) はじめに

熱田原貝塚は沖縄本島南部の知念村字志喜屋与那嶺原に所在する（第1図）。本貝塚は字志喜屋後方に広がる琉球石灰岩台地の東南端部に位置し、同部の地隙内に堆積した縄文後期の貝塚で、カーボン年代は 3370 ± 80 y.B.P. (1408 B.C.) である（註1）。本貝塚は第二次大戦直後、隣接する小さな農道の拡張工事によって上半部約3 mの堆積層はすでに破壊されていた。この工事による破壊が遺跡発見の端緒となった。残存の下半部も3 m前後の層厚があり、出土した土器はほとんどが伊波式土器であった。したがって、本貝塚の下半部は伊波式主体の文化層と見る事が出来る。

本貝塚では1957年と1958年の両年に試掘調査が行われ、初年度分の成果については、その概要を琉球政府文化財保護委員会発行の『文化財要覧1958年度版』（註2）に寄稿した。その後、本貝塚の土器については『沖縄国際大学文学部紀要社会学科編』第1巻第1号（註3）で分類と記述を試み、また、自然遺物のうち貝類及び獣漁骨については同じく『沖縄国際大学文学部紀要社会学科編』第19巻1・2合併号（註4）に概要を報告した。今回は石器について簡単に報告したい。ところで、出土遺物の中には現在、次の二つの理由で手元にないものがある。

① 本貝塚の発掘調査は米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）のC.W.ミーヤン教授と共同で行い、調査資金もUCLAから支給された。そのため出土遺物の一部は現在UCLA考古学科の資料室に保管されている。ミーヤン教授は数年前、故人となられたが、前記の理由により今回も両名の名で報告を行うものである。

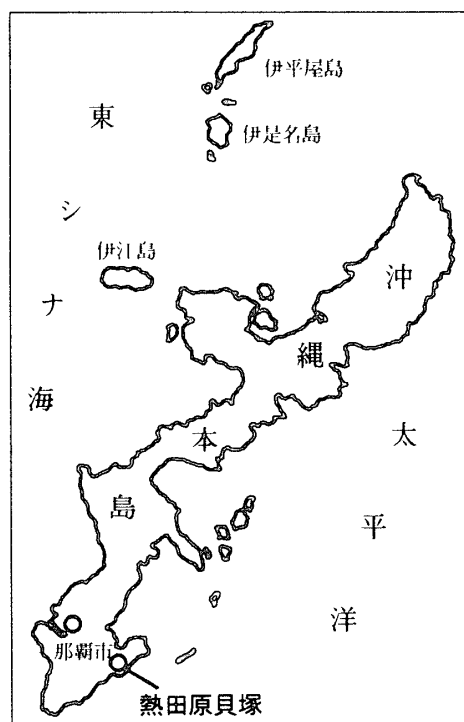
② 1975年、共同執筆者の一人である高宮の自宅が隣家からの出火で類焼に合い、保管していた遺物の一部はその際、焼失あるいは紛失してしまった。不慮の災難とはいいいながら甚だ残念で、ここに紹介できないものもあり、その点、関係各位に心からお詫び申し上げたいと思う。

以上の理由から、今回紹介できるのは図示した14点と集落内で表採した1点である。出土遺物のうち小破片で器種の把握できないものは、碎片とともに記述を省略した。

II) 熱田原貝塚の石器

本遺跡における石器の出土量は極めて少なく、1957・58両年度分を合わせても14点（第1表）に過ぎない。完形品は少なく、ほとんどが破損品である。したがって、器種の判明するのも多くはない。

以下に各標品について簡単に記述しておきたい。サイズは縦、幅、厚さとも残存部における最大値である。なお、出土



第1図 熱田原貝塚の位置

層欄のアルファベットのキャピタルは発掘区を示す。例えば、C/30" - 36" はC区の30-36インチ・レベルをさす。

第2図1 (写真1-1)

- ① 器種 石斧
- ② サイズ 縦 9.9cm 幅 5.6cm
厚さ 2.8cm 重量 330g
- ③ 石質 輝緑岩
- ④ 出土層 表採
- ⑤ 摘要 本標品は志喜屋集落の方が表採

したもので、縦・幅の比率がトランプカード状の平面形を有する。しかし、厳密には刃部の幅が頭部より若干大きく、撥型に分類すべきものである。扁平な自然礫を利用したもので、研磨は刃部を中心に行なっている。表面（図の左）の刃部左端に加工前の欠落部分が残し、研磨は同部上方にも及んでいるが、徹底していない。そのため破損面の大部分は研磨前の状態で残っている。裏面（図の右）も刃部を中心に研磨を施す。研磨は一部刃部上方の破損面にも及んでいる。つまり、破損面も含め胴下半部にも研磨を部分的に施す粗雑な半磨製の石斧である。基部及び両側面とも剥離調整によって器形を整え、研磨は施されていない。両刃石斧であるが刃縁はかなり潰れており、叩石に転用されたものであろう。刃部は破損していて、使用痕の有無を確かめ得ない。

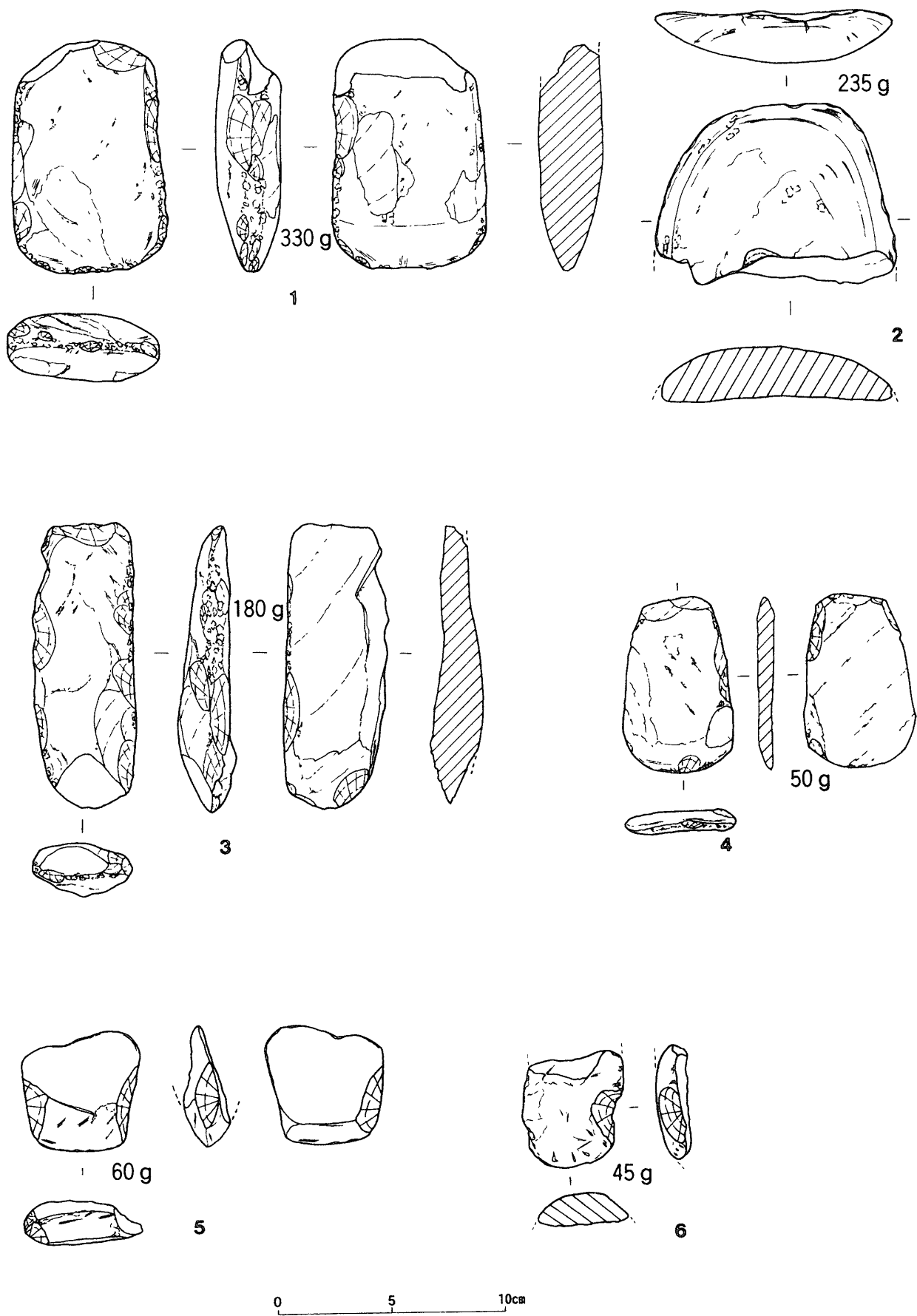
トレンチ レベル	A						B
	C	C-1	D	E	F	合計	H
0" - 6"			1			1	
6" - 12"							
12" - 18"	1					1	
18" - 24"							
24" - 30"							
30" - 36"							2
36" - 42"			1			1	
42" - 48"	2			1	1	4	3
48" - 54"							
54" - 60"							
60" - 66"					1	1	
66" - 72"							
72" - 78"							
78" - 84"							
84" - 90"					1	1	
90" - 96"							
96" - 102"							
102" - 106"							
106" - 112"							
112" - 118"							
118" - 124"							
124" - 130"							
合計	3	0	2	1	3	9	5

第1表 熱田原貝塚出土の石器

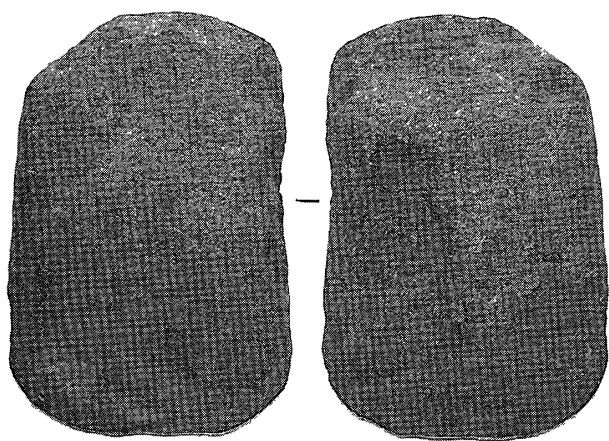
第2図2 (写真1-2)

- ① 器種 自然礫?
- ② サイズ 縦 7.5cm 幅 10.5cm 厚さ 2.1cm 重量 235g
- ③ 石質 片状砂岩
- ④ 出土層 C/42" - 48"

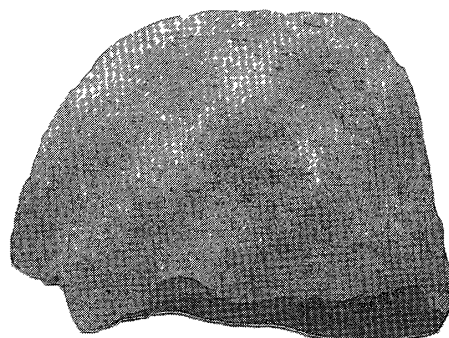
⑤ 摘要 本標品は背面全体が節理にそって大きく剥落した表面のみの残存資料で、石斧の頭部破片のようにも見えるが、現存部の最大幅が10.5cmもあり、石斧とすればかなり大型のものになる。大型の石斧は第4図に示すように知念村志喜屋集落で1例表採され、皆無とはいえないが、この種の大型の石斧は沖縄では稀少で、例外的な存在である。したがって、石斧というより磨石の破片ではなかろうかと考えてみたが、現標品には研磨痕も認められず、その可能性も薄い。現存部の表面は自然面である。本資料は石材として持ち込まれた可能性もある。



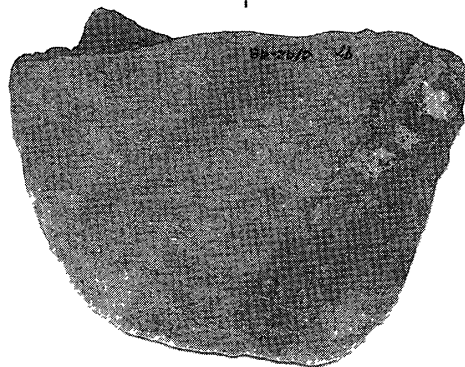
第2図 熱田原貝塚出土の石器



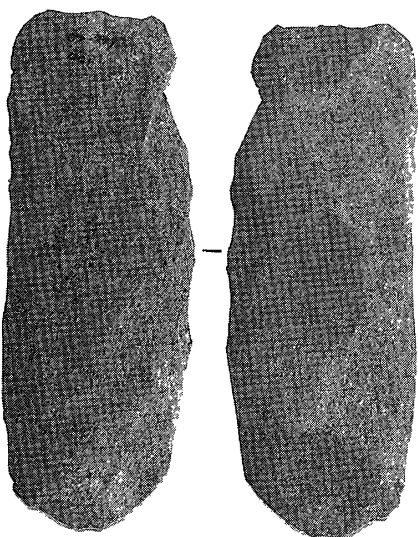
1



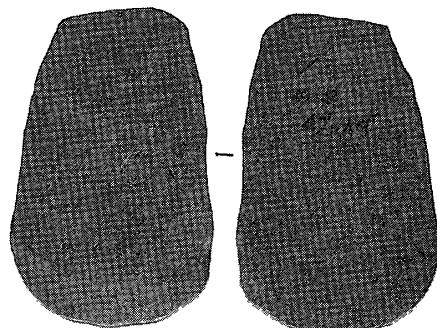
1



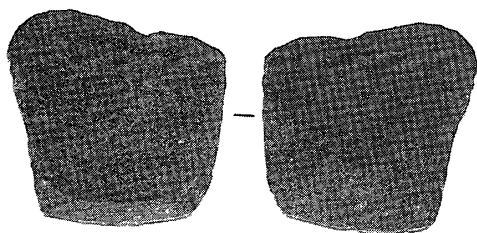
2



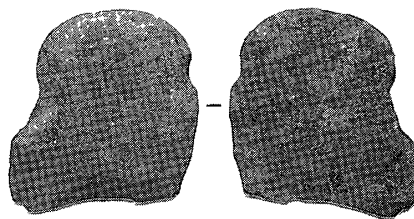
3



4



5



6

写真1 熱田原貝塚出土の石器

第2図3 (写真1-3)

- ① 器種 石斧 (未成品?)
- ② サイズ 縦 12.2cm 幅 4.4cm 厚さ 2.3cm 重量 180g
- ③ 石質 砂岩
- ④ 出土層 C/42" - 48"

⑤ 摘要 本標品は石斧の未成品であろう。調整剥離によって概形を整えているが、以後の加工は認められない。表面 (図の左) はほぼ全面に自然面が残り、同中央部では頭部から刃部近くまでわずかながら縦位の不規則な研磨痕が認められる。縦断面は刃部の近くで「く」の字状に屈曲しており、土掘り具としての用途も考えられる。しかし、刃部と見られる部分は両面とも剥離直後の状態をそのまま残しており、使用等による摩耗は認められない。

第2図4 (写真1-4)

- ① 器種 石斧
- ② サイズ 縦 7.5cm 幅 4.9cm 厚さ 1.0cm 重量 50g
- ③ 石質 砂岩
- ④ 出土層 E/42" - 48"

⑤ 摘要 本標品は小型石斧の破損品で、裏面全体が剥離して平坦になっている。したがって、正確な厚さは不明。表面も大部分は剥離面で、刃部とその直上に研磨痕が残る。研磨は丁寧である。また、表面の剥離面にはわずかながら摩耗痕も認められる。背面を欠くため片刃か両刃か不明。刃部にある剥離痕の右端に使用痕らしきやや太めの条線が見受けられる。

第2図5 (写真1-5)

- ① 器種 石斧 (刃部)
- ② サイズ 縦 5.2cm 幅 5.1cm 厚さ 1.9cm 重量 60g
- ③ 石質 輝緑岩
- ④ 出土層 F/42" - 48"

⑤ 摘要 両刃石斧の刃部破片である。表裏とも大きく欠落し、全体形は把握できない。刃縁はわずかに欠け、鋭さは見られないものの、破損前はかなり鋭利な刃縁を形成していた形跡が窺え、また、現存部から推して重厚な石斧であったと思われる。使用痕は確認できない。表面 (図の左) の刃面は横断面で見ると左右の方向に若干弯曲しているが、裏面の刃面はやや平坦に整形され、刃縁の正面観は若干丸ノミ的である。精巧な石斧であったと思われる。

第2図6 (写真1-6)

- ① 器種 石斧の破片?
- ② サイズ 縦 4.8cm 幅 4.4cm 厚さ 1.4cm 重量 45g
- ③ 石質 輝緑岩

④ 出土層 D/36" -42"

⑤ 摘要 現破片のサイズや形状からして石斧の破片のようにも見えるが、定かではない。表面には一応研磨が認められるものの、滑沢を有するほど丹念ではない。裏面（図の裏）は大きく縦に割れ、風化などによる摩耗痕が残る。また、破損後の周辺部も剥離直後の鋭さはなく、若干丸みを帯び、摩耗が進行している。図の下端部は石斧であれば、刃部ではなく、現存部の彎曲からすると基部であろう。刃部通有の形状とはやや趣を異にしている。

第3図1 (写真2-1)

① 器種 叩石

② サイズ 縦 10.6cm 幅 6.8cm 厚さ 2.4cm 重量 250g

③ 石質 砂岩

④ 出土層 H/30" -36"

⑤ 摘要 砂岩質の軟弱な石材を用いて作られた叩石である。打製で、研磨は施されていない。しかし、全面著しく摩耗していて、手触りは滑らかである。下端部は敲打に使用したと思われるが、この部分も摩耗していて、敲打痕は見受けられない。両側縁の小さな挟り部は握ると指にフィットする。両平面の中央部に叩いたときに出来るような凹部は見受けられない。

第3図2 (写真2-2)

① 器種 叩石・凹石兼用？

② サイズ 縦 10.0cm 幅 5.5cm 厚さ 3.2cm 重量 310g

③ 石質 安山岩

④ 出土層 H/42" -48"

⑤ 摘要 全面に自然面を残す標品だが、摩耗が著しい。平面中央部の凹みは使用によるものと思われるが、明確な使用痕は見られない。但し、内面は滑らかではなく、多少の小さな凹凸が認められるので、敲打による使用痕の可能性はある。下端の先端部にはわずかながら敲打痕も見受けられる。

第3図3 (写真2-3)

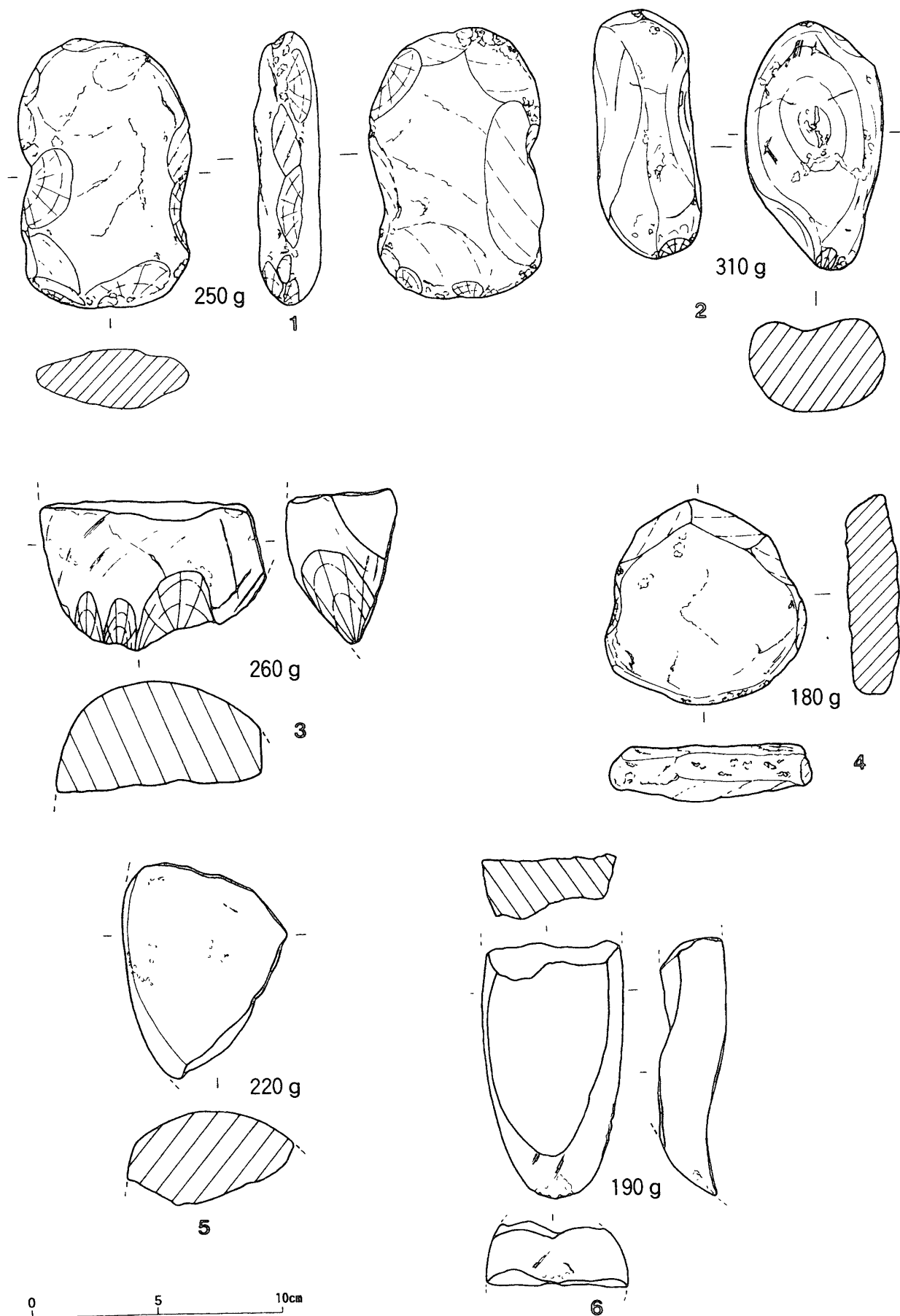
① 器種 磨石？

② サイズ 縦 5.9cm 幅 8.4cm 厚さ 4.3cm 重量 260g

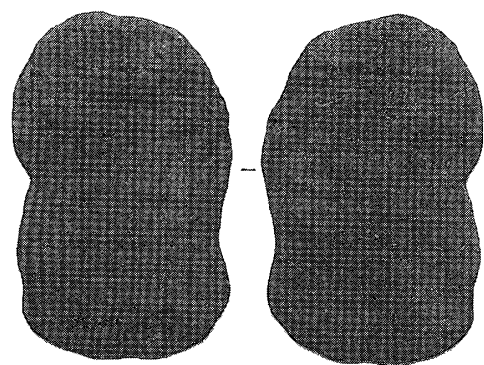
③ 石質 砂岩

④ 出土層 H/42" -48"

⑤ 摘要 大型石器の一部である。現存部（図の左）は上部、右端、裏面が大きく欠けている。表面はよく磨かれ滑沢を有する。下端も一部破損しているが、手慣れ様の滑沢が残る。現存部から推定できる器種は磨石である。



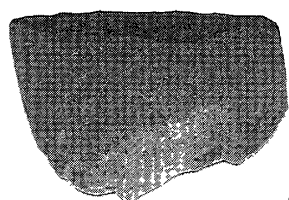
第3図 熱田原貝塚出土の石器



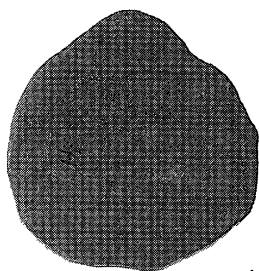
1



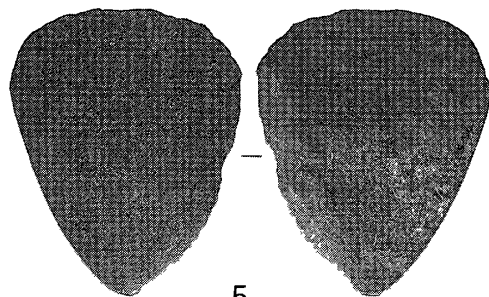
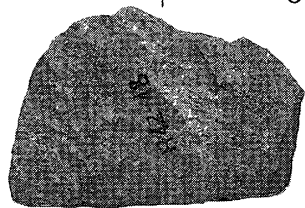
2



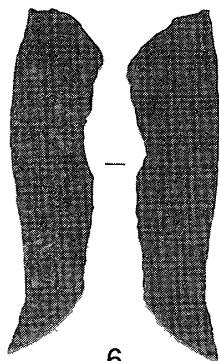
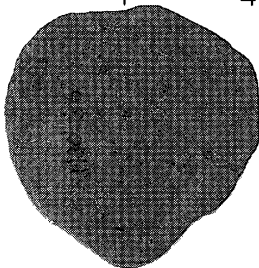
3



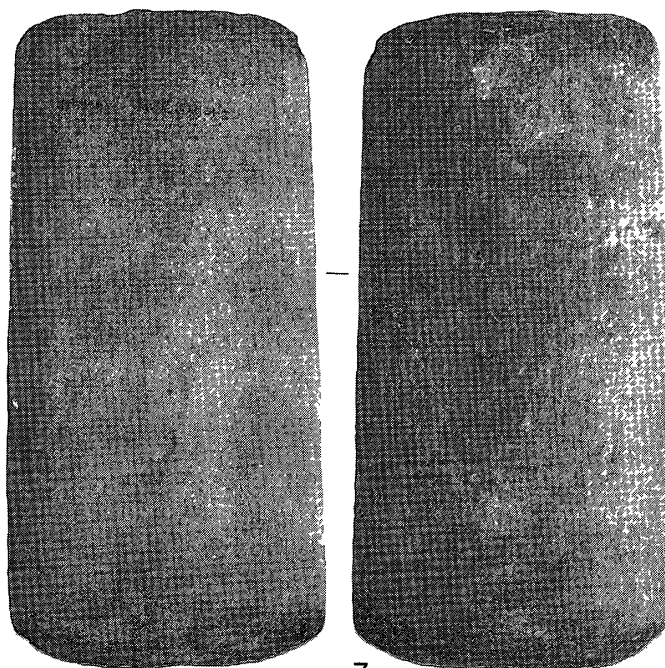
4



5



6



7

写真2 熱田原貝塚出土の石器（1－6）と志喜屋集落採集の大型石斧（7）

第3図4（写真2－4）

- ① 器種 用途不明
- ② サイズ 縦 8.1cm 幅 8.3cm 厚さ 2.3cm 重量 180g
- ③ 石質 砂岩
- ④ 出土層 H/30"－36"

⑤ 摘要 砂岩利用の軟質円盤状製品。表面は摩耗によって、やや平坦になっている。裏面には剥離調整の加工痕が残り、表面より凹凸は著しいが、摩耗によって剥離直後のような粗さは消滅している。周縁部についていうと、下端は丸みを帯び滑らかになっていて加工痕や使用痕は見受けられないが、上縁には加工痕が残る。しかし、摩耗によって粗さは消失している。器面では金雲母のような微小な物質も散見される。叩石というより、手に握って何かを研磨する際に使用したのかもしれない。つまり、研磨用石器の可能性はないか。両側縁の凹みは手に握るとよくフィットする。

第3図5（写真2－5）

- ① 器種 磨石？
- ② サイズ 縦 8.4cm 幅 6.6cm 厚さ 3.9cm 重量 220g
- ③ 石質 砂岩
- ④ 出土層 F/84"－90"

⑤ 摘要 大型石器の破片である。残存部は全体の1/4程度か、あるいはそれ以下であろう。表面を含むごく一部が残っている。表面は研磨され、すべすべしている。特に敲打に使用した形跡は見受けられない。現存部から推定できる器種は大型の磨石である。

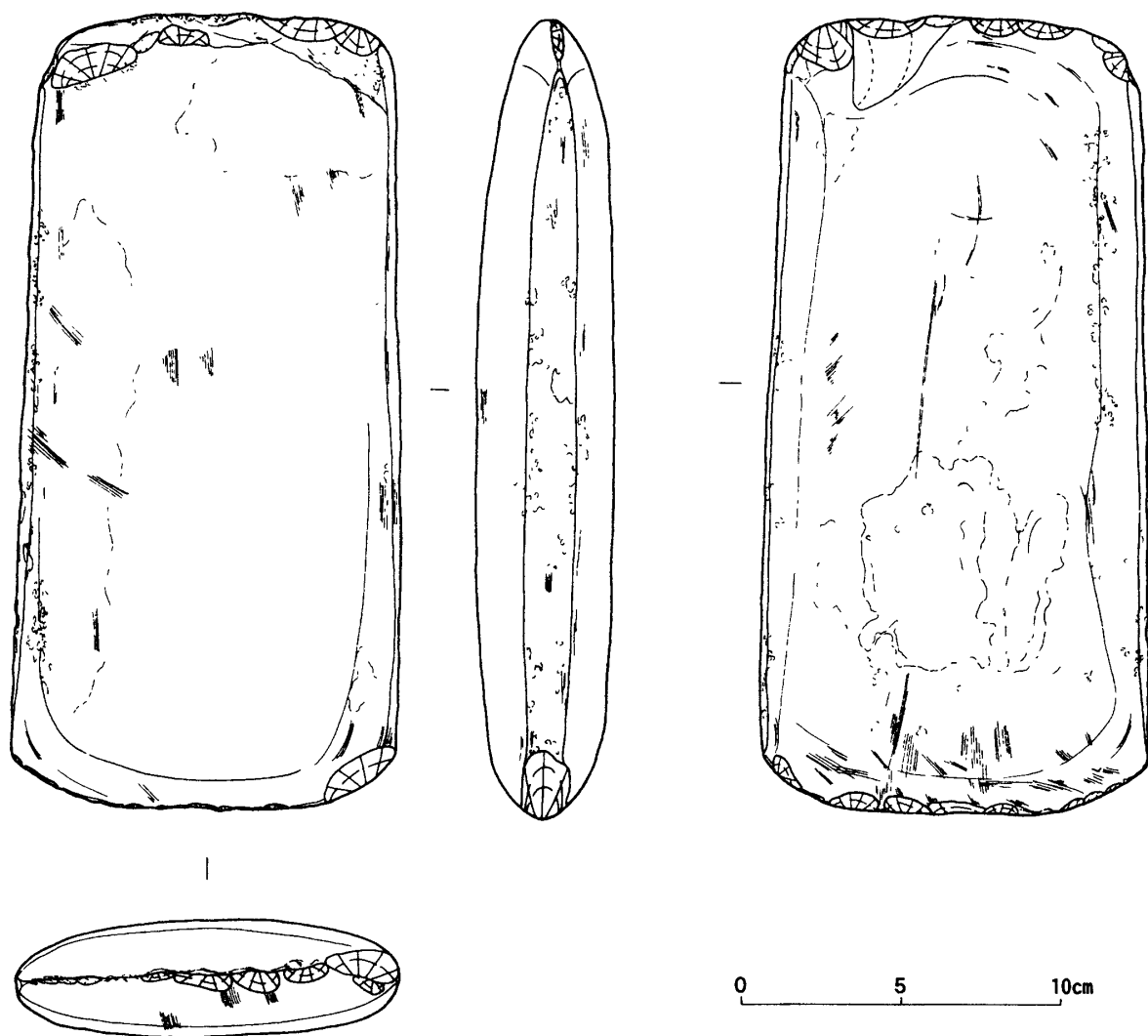
第3図6（写真2－6）

- ① 器種 磨石
- ② サイズ 縦 10.1cm 幅 5.6cm 厚さ 2.3cm 重量 190g
- ③ 石質 石英斑岩
- ④ 出土層 H/42"－48"

⑤ 摘要 図の表面、裏面、上部が大きく欠落している。現存部の表面はよく研磨され、かなりすべすべしている。現器面に敲打痕は見受けられない。断面楕円状の大型磨石の破片と見られる。

第4図（写真2－7）

- ① 器種 石斧
- ② サイズ 縦 24.8cm 幅 12.2cm 厚さ 3.7cm 重量 2250g
- ③ 石質 輝緑岩
- ④ 出土層 表採



第4図 志喜屋集落採集の大型石斧（2,250 g）

⑤ 摘要 大型の磨製石斧である。平面形は短冊型に近いが、刃部が基部より若干幅が広いので、厳密に言えば撥型に分類することが出来る。側面の一部に敲打痕がわずかに残っているものの、全面よく研磨されている。基部には剥離調整痕が残り、研磨はほとんど行われていない。刃縁は使用により破損している。右図の刃部には縦位の擦痕がかなり見受けられ、部分的に右下がりの擦痕も認められる。このような擦痕は裏面の刃部には少ない。本標品は志喜屋の集落を通る旧県道脇の人家の庭先に設置された水タンクの蓋（ベニヤ板）の錘に使用されていたものを、熱田原貝塚調査の際、貰い受けたものである。この種の大型、重量級の石斧は沖縄では極めて珍しい。むしろ例外的なものである。表採品のため、時期の特定できないのが残念である。

以上、器種が判明ないしは推定可能な12点について概要を記した。器種が判明するものは石斧6点、アッズ・ブレイド2点、叩石2点、磨石3点、不明1点、自然礫1点である。叩石の2点（第2図1と第3図1）のうち1点は石斧を転用したものである。上記諸製品のうちここで特記したいのはアッズ・ブレイドである。

Ⅲ) アッズ・ブレイド

アッズ・ブレイドとは写真3（第5図）に示すもので、2点出土している。本資料はUCLAの登録簿には adze blade と記されている。この adze blade を日本語にどう訳すべきか、40数年前の概報執筆のころは敗戦直後の、文献のほとんどない時代で、そのため適当な訳語を探し出せず、拙稿（註2）では単に「手斧」として紹介したが、小文では標題のようにアッズ・ブレイドの名称を採用することにする。この名称も適当な呼称かどうか、単にブレイドでもよいと思うのだが、とりあえず、UCLAの分類にしたがっておく。

第5図1（写真3-1）はスレート製で、最大長5.5cm、最大幅2.9cm、厚さは2.5mm前後である。裏面の一部（側縁の上端と下端）に敲打痕が残るが、他は全面磨製の、精巧な製品で、両側面も面取りされ、横断面が長方形を呈する、いわば定角式のタイプ

である。平面形も長方形であるが、左図の左側縁部は中央やや下方でくの字状に軽く屈曲。刃部は平面の上下両端に設けられており、いわゆる双刃石器である。ただ、下端は若干刃こぼれがあり、上部は過半部が欠損している。しかし、上下両端に若干鋭利な刃が残っている。器面には表裏とも亀裂が斜めに走っている。C/12~18インチレベルの出土。

同図2（写真3-2）もスレート製で、最大長6.9cm、最大幅3.9cm、厚さは3mm以内の薄型である。本標品は打製で、図の上端は破損し、同部における刃部の有無は不明。下端にはわずかに研磨痕が見られ、刃部の痕跡を残す。但し、下端も全縁わずかに欠け、刃は最早残っていないが、裏面（右図）の下端に研磨痕がわずかに残っており、刃部であることを示している。表面（左図）は左側縁部下端（使用痕の部分）に研磨面が残っている。つまり、本標品は一種の局部磨製である。刃部以外は打製のままだが、表裏面とも全面に手慣れようの摩耗痕が残る。下端の刃部（左図）には横方向の使用痕が明瞭に残っており、左右方向に移動しながら使用したことを暗示している。本標品はおそらく現状のまま使用したものであろう。本標品の形状・加工の具合や意図からするとブレイドと呼ぶべきか。切截具としての用途が推定される。D/54~60インチレベルの出土である。

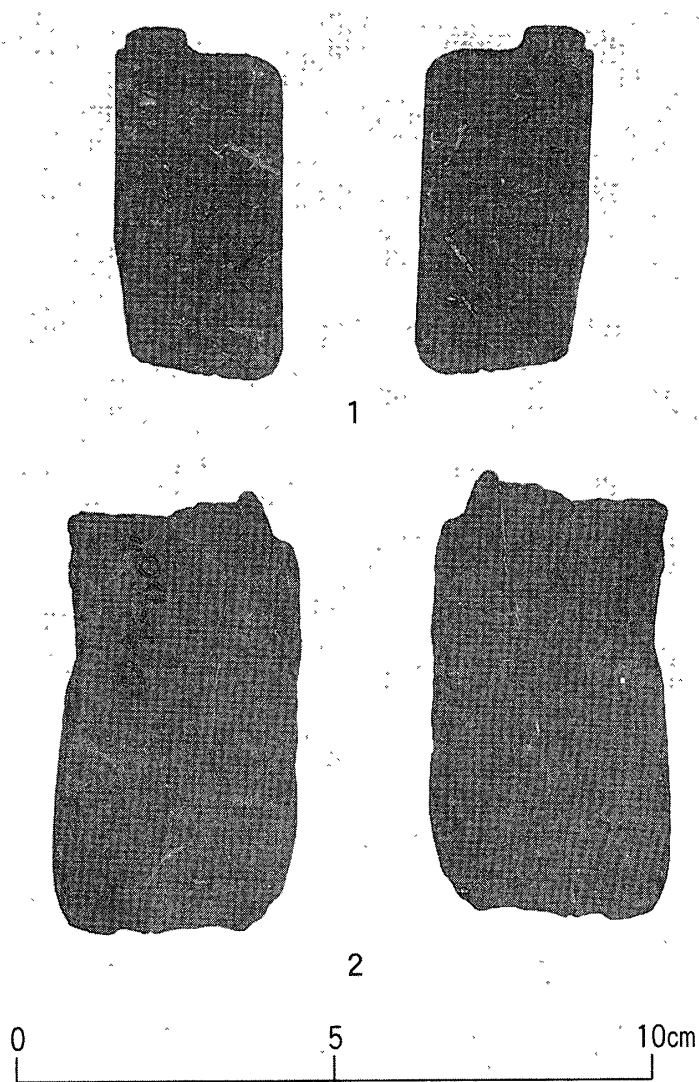
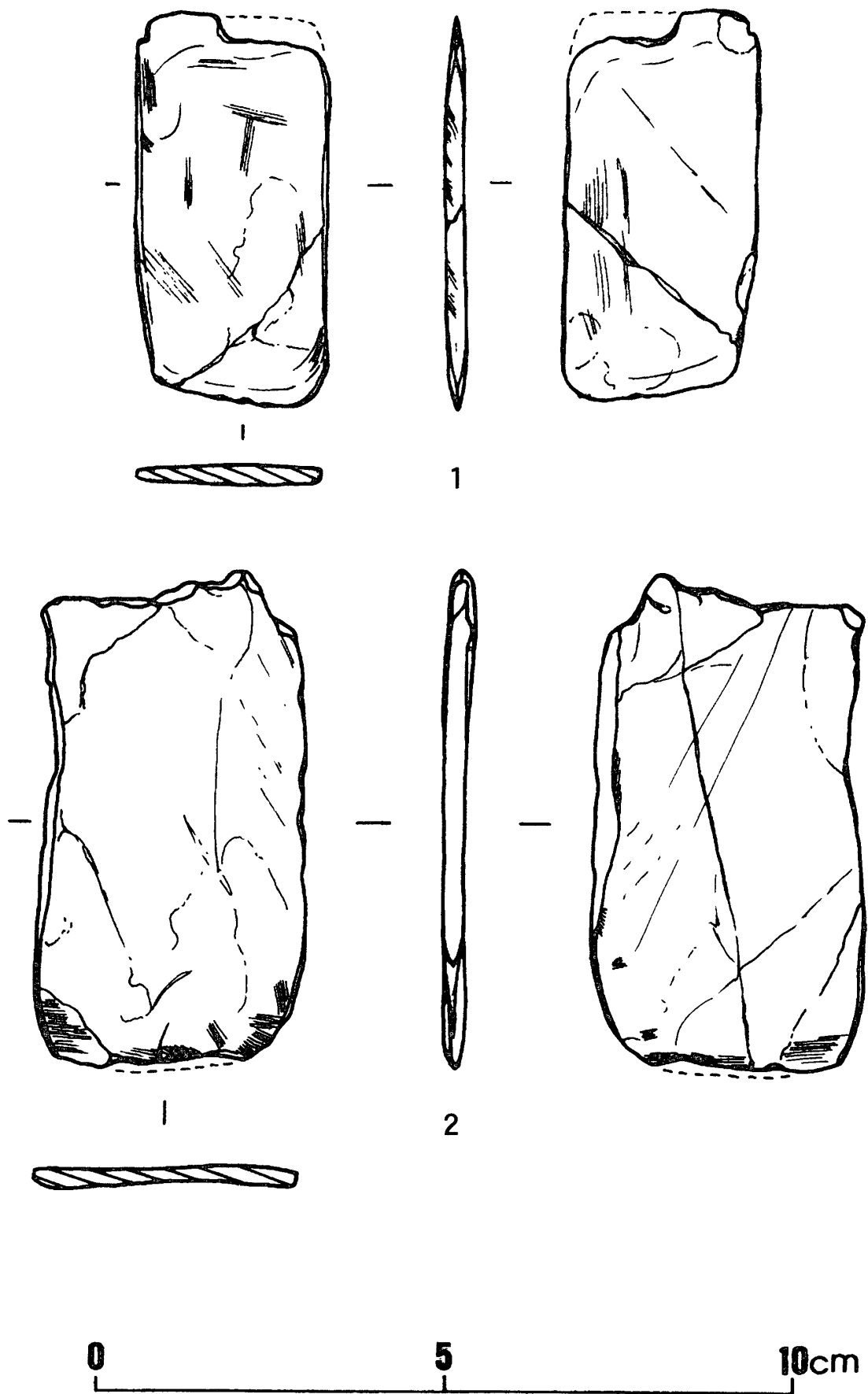


写真3 熱田原貝塚出土のアッズ・ブレイド



第5図 熱田原貝塚出土のアッズ・ブレイド

この種のブレイド的な製品は沖縄諸島では未だ類例の報告を聞かない。しかし、かつて沖永良部島で、これに類する製品を見たことがある。時期もほぼ同じであった。上記両製品とはやや異なるが、沖縄諸島では全面磨製の規格的なものが、嘉手納貝塚（註5）、室川貝塚（註6・7）、前原遺跡（註8）などの縄文後期遺跡で出土しており、有孔のことが多い。この種の磨製品は後続の晩期の遺跡からも出土している。この種のブレイド的磨製品については、後日、稿を改めて取り上げてみたいと思う。

IV) おわりに

以上、熱田原貝塚で出土した10数点の石器資料のうち、器種の判明ないしは推定可能な14点と表採資料の1点について紹介した。最も多いのは石斧である。石斧の中には未成品としたものや叩石に転用したものも含まれる。叩石は2点で、そのうち1点は石斧から転用したものである。アッズ・ブレイドは2点得られ、凹石も叩石兼用と考えられるものが1点検出されている。あとは磨石の破片と見られるものであった。

本貝塚から出土した石器のうち特筆すべきものに2点のアッズ・ブレイドがある。この製品の有する形態的特徴からすれば切截具であろう。獣類や魚類などの調理の際、利用されたと見られるが、貝製品や骨製品の製作・加工にも使用されたかどうか、今後解明していく必要がある。

表採の大型石斧（第4図）も注目すべきものである。ただ、表採であるために時期を特定できないのが残念である。大型石斧は恩納村でも1例表採され、県立博物館に展示されている。現在のところ、沖縄における大型石斧はこの2点だけで、あとは中・小型の石斧で構成されている。このような大型石斧がどういう目的で製作されたか、これも今後の課題である。

なお、石質の同定を石川高等学校長の大城逸朗博士にお願いし、実測図は知念村教育委員会の大城秀子さんが引き受けて下さった。記して感謝申し上げる次第である。（2000, 1, 30 脱稿）

【註】

1. Meighan, C.W. "Early Prehistory" RYUKYUAN CULTURE AND SOCIETY, University of Hawaii Press, 1964
2. Meighan, C.W.・高宮 廣衛 「知念村熱田原貝塚発掘概況」『文化財要覧 1958年版』琉球政府文化財保護委員会、1958
3. 高宮 廣衛・C.W.Meighan 「熱田原貝塚の土器」『沖縄国際大学文学部紀要社会学科編』第1巻第1号、沖縄国際大学文学部、1973
4. 高宮 廣衛・C.W.Meighan 「熱田原貝塚採集の貝類と獣漁骨」『沖縄国際大学文学部紀要社会学科編』第19巻第1・2合併号、沖縄国際大学文学部、1992
5. 新田 重清・嵩元 政秀 「嘉手納貝塚発掘報告書」『文化財要覧—1959年度版』琉球政府文化財保護委員会、1959
6. 沖縄市文化財調査報告書 第1集 『室川貝塚』沖縄市教育委員会、1979
7. 沖縄市文化財調査報告書 第17集 『室川貝塚』沖縄市教育委員会、1999
8. 宜野座村の文化財14集 『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999

(10) 琉球先史考古学に関する近年の新知見

I) はじめに

琉球諸島における考古学上の発掘調査は、ここ10数年行政発掘が主流で、学術調査はきわめて少ない。そのため調査自体も市街地の歴史時代遺跡に集中する傾向にあり、先史時代の遺跡が対象となることは稀である。結果として歴史時代については資料も急速に蓄積され、研究も活況を呈し成果を挙げつつあるが、先史時代の研究は寥々たる有様である。しかし、そのような中であって先史時代に関する重要な資料が幾つか得られており、小文では先史時代に関するこのような新知見の主なものを簡単に紹介したい。

II) 旧石器時代

旧石器時代に関する研究は今日まで旧石器そのものの発見がなく、考古学上の進展はほとんど見られない。しかし、近隣の奄美諸島では2～3万年前に属する不定形石器群が徳之島の天城遺跡(註1)や奄美本島の喜子川遺跡(註2)、土浜ヤーヤ遺跡(註3)などで知られている。これらの不定形石器群は九州以北ではほとんど見られず、台湾や中国大陸南部地域などに特徴的な石器である(註4)。奄美諸島出土のこれらの石器群は沖縄で将来発見されるであろう石器の性格を考える上で参考になる。

旧石器時代に関する考古学上の研究は前述のように停滞状態にあるが、隣接分野の形質人類学の領域では更新世末期の港川人について、形質の特徴や生活文化との関わりなどが少しずつ分かってきている。

例えば、馬場悠男によると、港川人は島嶼環境に適応した古代的特徴を多く残す特色をもつ(註5)。したがって、大陸や大きな島にすむ同時代人とは形質的特徴が大きく異なっている。港川人の形質については、いろいろの特徴が明らかにされてきているが(註6)、ここでは紙幅の都合で、主要なものの若干を簡単に紹介しておきたい。

港川人は先史時代人のなかで最も小さい(註7)という。かれらは沖縄島という狭い島嶼環境の中で生活していたので、身体特徴の多くは乏しい栄養状態に対する適応と解釈されている(註5)。馬場悠男によると、港川人の骨には狩猟や採集生活に順応した特徴が見受けられ、前腕および手の筋肉はよく発達し、下脚は強健だった。彼らの手はたくましく、単純な道具類を使用するには十分で、脚は長距離を歩いたり、走ったりしてもさして苦にならないくらい頑強だった(註6)。要するに「港川人の骨格特徴は、彼らが狭く凹凸の激しい土地にすみ、粗末で栄養の乏しい食物を摂っていた」(註5)証拠であろうとする。

さて、次に人骨から読みとれる生活文化面のことを若干紹介したい。人骨に加えられた傷や人骨に見られる機能的特徴は生活文化面の行動に由来することが多い。かつて鈴木尚は抜歯(20歳前後の港川人女性下顎骨の中切歯が欠落)や食人(港川人Ⅳの女性前頭骨に見られる穿孔痕)の風習を指摘し(註8)、埴原和郎も港川人の歯の大部分が著しく摩耗していることに注目、硬く粗い食物

をたくさん食べた証拠と見た（註9）。このような歯の摩耗現象は同時代のゴヘズ洞人（註10・11）やピンザアブ人（註12）にも認められる。

以上がこれまでの研究成果であるが、近年、馬場悠男は港川熟年女性の上腕骨の下端が同じ位置で切断されていることについて葬送儀礼の痕跡かとしている（註13）。沖縄の先史時代人は下肢に対する上肢の発達程度が相対的に強いようだが、このことは上肢を多く使う漁労と関連した特徴と見られている（註7）。しかし、旧石器時代の港川人は、その逆で、上肢が下肢に比べて華奢という。ただ、港川人のこのような形態的特徴がどのような生活形態に由来するのか、現在のところ、推定は困難のようだ（註7）。

ところで、韓国の忠清北道清原郡文義面に所在するトゥール峰洞穴遺跡内の興洙（フンスウ）洞穴で旧石器時代末期に属する幼児骨が2体発見されている。図録にカラー写真で紹介されている。1体は5～6歳で、他の1体は5歳以下という（註14）。沖縄でも山下町洞人という更新世に属する7歳前後の女兒の骨が発見されており、両者間に形質学上の異同が見られるか大いに興味をもっているが、興洙洞人に関する研究報告書が手元になく、入手可能かどうか現在照会中である。

なお、韓国の旧石器時代終末期を代表するスヤンゲ（垂楊介）遺跡の剥片尖頭器（註15）は九州にも伝播していることが知られているが（註16）、現在のところ、この種の石器は南島では未発見である。

Ⅲ）沖縄諸島の縄文時代

新石器時代の前半部、つまり、縄文時代についても発掘件数は少なく、編年上の基本的な進展は見られない。しかし、沖縄諸島では幾つかの新発見があり、その主なものを若干取り上げてみたい。

まず、新資料の第1点は植物利用に関する新たな資料が得られたことである。植物資料は特殊な条件下でないと遺残しにくい。沖縄はこれまでこのような条件に恵まれず、植物利用の実態が掴めずにいた。しかし、近年の資料により植物利用の一端を垣間見ることができるようになった。人工遺物と自然遺物が得られている。

植物遺体はこれまで縄文早期末の北谷町野国B地点のほか、晩期の宮城島高嶺遺跡や具志川市の苦増原遺跡などで出土している。野国B地点ではシマグワやウルシ属、イヌビワ属利用の木材片（註17）、高嶺遺跡ではタブノキの子葉（註18）、苦増原遺跡の貯蔵穴からはブナ科のコナラ属やスダジイ等の果実（註19）が数種検出され、また、縄文後期初頭の古我地原貝塚でも炭化種子は検出されているが、未同定のため詳細は不明である（註20）。このように食材や加工品の一部についてはすでに判明していたが、近年の調査により、従来不明であった木製品や竹製品など新たな資料が明らかになった。次に、前原遺跡や伊礼原C遺跡の資料を簡単に紹介したい。

前原遺跡は沖縄本島北部の宜野座村にあり、縄文中期末（神野A式）以降、現代までの遺物を埋存する住居期間の長い複合遺跡で、地山まで12層が確認された。第Ⅸ～Ⅺ層は縄文後期の伊波式や萩堂式を主体とする層だが、下部では神野A式が得られ、本遺跡の上限を示す目安となっている。これらの層から多数の植物遺体が出土している。まず、人工遺物から見ていくことにする。その主

なものは下記の通りである（註21）。

種 類	出 土 層
1. 舟の舳先	IX－3
2. 杯状製品	IX
3. 木の実加工品	IX
4. 割載材	IX・XI
5. 棒状製品	IX・X・XI・XII
6. 削り木屑	IX
7. 薪の燃え残り	IX・X
8. 竹製容器（バーキ）	IX・XI

舟の資料は丸木舟の舳先の一部で、残存部は先端から約1.5mである。想定復元図によると、長さ4m前後、幅は50cmに近い。オキナワジイが用いられている。舟底には手斧による削りがなく、樹皮を剥ぎ取った原木面を残し、内部には加工痕が認められる（註21）。

杯状製品は枝の付け根の部分を利用したもので、用途は不明とされるが、杯状製品という名称は現存部の形状に由来するという。樹種は不明。そのほか木の実に穿孔したものが2例検出されている。いずれもIX層の出土で、一つはホルトの実とされているが、他の1点の樹種は不明（註21）。

人為的加工痕をもつ木材片は上記のように多数検出されている。これらはアカガシ亜属、シマタゴ、ミサオノキ、オキナワジイ、スダジイ、マツ属、ホルトノキ、マサキ類、マキ属、フクマンギ、イスノキ、クチナシ、アカミズキ、クロヨナ、モッコク等、多くの樹種が利用されている（註21）。上記の丸木舟や柱はオキナワジイで作られ、また、板も大部分はオキナワジイを用いている。このような状況からオキナワジイは当時の重要な木材だったと報告されている（註22）。

次に、竹製品がある。竹で編んだ容器（ザルなど）で、方言で「バーキ」と呼ばれている。IX・XI両層の貯蔵穴に伴って13点の破片が検出されている。容器の形態は不明だが、編み方はざる目と巻き付けの2種類が認められ、前者が数の上では圧倒的に多い。底部については菊床編みが確認されている（註23）。竹は2種使用されているが、同定不能のようだ（註22）。

貯蔵穴はすでに縄文晩期の苦増原遺跡でも出土しており、新出の資料とはいえませんが、苦増原例が住居址に伴うものであったのに対し、前原遺跡の貯蔵穴は水場遺構に伴う新例であり、性格の異なる貯蔵穴を確認できた点で貴重であった（註24）。

以上のほか、前原遺跡では自然遺物として種子や果実などの大型植物群がⅧ～XII層で多数検出されている。これらは文化層から検出されたもののほか各種の遺構に伴うものまで、出方も多様である。同定の結果は33分類群とドングリ類（幼果のため分類不能のもの）および不明17種類となっている（註25）。同定された33分類群の中にはオキナワウラジログシ、マツ属、アダン、ヤマモモ、コナラ属、シイノキ属、マテバシイ属、センダンなどがある。その中で人間が意図的に利用したのはオキナワウラジログシだけで、他は自然堆積と考えられているが（註25）、スダジイやマテバシ

イ属、ヤマモモ、ブドウ属などは、出土量は少ないものの食用可能という理由から利用残滓の可能性も指摘されている（註26）。

沖縄本島中部の北谷町にある伊礼原C遺跡は縄文前期の遺跡で平成7年以降の発掘調査により良好な曽畑式土器が出土、編年的には読谷村の渡具知東原遺跡の曽畑式土器に先行する古い時期の遺跡である。土器は曽畑式土器のほか新種の突帯文土器も発見されている。本遺跡でも多量の植物遺体群が検出されている。ただ、調査は現在も進行中で、そのため正式な調査報告書は未刊だが、これまで発表された中間報告書や沖縄考古学会などで発表された資料（レジメ）によると、植物遺体は人工・自然両遺物が得られている。前者から見ていくことにする。下記の資料が報告され（註27）、前原遺跡では未発見だった新種の資料も含まれている。

- | | |
|-----------|----------|
| 1. 櫛 | 縄文晩期 |
| 2. 木製容器 | 面縄前庭式土器期 |
| 3. 網代 | 曽畑式土器期 |
| 4. 有孔板状製品 | 曽畑式土器期 |

木製の櫛は数年前に発見され、すでに新聞でも紹介されているので、一般の人々にも一応なじみの製品である。当初、縄文前期の曽畑式土器に伴うという情報が流れていたが、この度の沖縄考古学会における口頭発表で晩期に訂正された。次の木製容器はボール状を呈し、レジメによると縦27cm、横63cm、高さ32cmである。材質は記されていないが、新聞では台湾や中国南部にしか生育しないショウナンボク使用と報道され、新聞記者から台湾との交流を示す資料かとコメントを求められたが、沖縄諸島と先島地方との交流も千数百年前になってやっと始まったくらいだから、5000年前に台湾と交流があった証拠とは考えにくい、と研究の現状を伝えた（註28）。このような状況から、もし台湾産であれば流木を利用した可能性が高い。なお、同紙によると出土した他の1点はタイワンヒノキのようである。

曽畑層出土の網代は前原遺跡で「パーキ」と方言名で報告されたものである。レジメによると1m四方の大きさのものだが（註27）、完形でないため全体形ははっきりしない。前原例が縄文後期の所産であったのに対し、本遺跡のものは前期に属し、上限を書き替えた貴重な資料である。

有孔板状製品とされるものは厚さ約1cmの板状のもので、10cm前後の三角形に近い形状を有し、1辺に径2cmの弧状の孔をもつ半欠品である。用途は不明。曽畑層からの出土で、他に10数点の木製品があるという（註29）。木製品も縄文前期に遡って認められたことになる。

以上が人工品に関するあらましであるが、自然遺物も豊富である。中間報告によると、約200ccの有機質遺物の中から検出された種子や堅果類は70種以上に及び、今後も増える見込みという（註29）。そして大半が食用可能とされ、常緑樹と落葉樹が混在している。また、中には南限が現在奄美諸島とされる資料（カジノキ、ニワトコ、カエデ属など）も見受けられ、当時やや寒冷な気候だったことも判明した（註29）。

縄文時代に関する重要な資料の第2点目は微小石器が確認されたことである。このことによって石器研究に新たな展開が期待できるようになった。チャートなどの剥片は以前から研究者によって注目され、筆者も1968年の熱田原貝塚調査以来、遺物は人工・自然を問わず研究上の重要な資料として細大漏らさず採集するよう努めてきた。熱田原貝塚では石器や石材等の破片も含め10数点採集したが、その中にチャートのような特徴ある石材が含まれていないのを見ると、チャートはもともと持ち込まれていなかったと思う。ただ、当時は肉眼観察を頼りに掘っていた時代であり、あるいは見落としという可能性もないとはいえない。また、篩による採集方法を知らなかったわけではなく、大学時代の実習などですでにトレーニングは受けていたが、篩は沖縄のマージ（赤土）などの粘土質の土には不向きで、そのような遺跡では主として肉眼観察に基づく発掘法をとり、篩は主に砂丘遺跡の調査時に使用した。現在は周知のように水洗法やフローテーション法などが採用されている。

ところで、チャートのような特徴ある石質・石材は目に付きやすく、多くの研究者がそれぞれの発掘現場で採集し、記録に止めてきた。チャートの産地は沖縄では本島北部の本部半島や伊平屋列島に限られ、沖縄本島中・南部に産地はない。そのため中南部地区でチャートが出土すると、それは即北部地方との交易を意味し、重要な考古資料となる。筆者も熱田原貝塚で発掘調査を開始して以来、先述のようにこのような特殊な遺物には常に注意を払ってきたが、チャートの剥片に初めて接したのは本島中部知花遺跡の調査と記憶している。チャートの破片を数点採集し、県文化課に保管していたが、収蔵庫が何回か移転を繰り返しているうちに、どこかに紛れ込んでしまったらしく、報告書に間に合わせることができなかった。そのうち出て来るものと期待している。

筆者がチャート等の剥片を報告書に記載したのはどの発掘調査からだったか、詳しくは調べてみないと分からないが、思い出すままに記すと、1977年の具志川市隅原遺跡（『沖国大考古』創刊号、1976）や1979年から数年にわたって行われた沖縄市室川貝塚（『沖国大考古』第2号、1978等）の報告書には記載されている。また、報告書には記載していないが、読谷村渡具知東原遺跡の曾畑層でもチャート片が多数得られ、現在、読谷村歴史民俗資料館に保管されている。渡具知東原の資料もいつか専門家に見てほしいと思っている。

ところで、これらチャートの剥片には破砕面に鋭い縁辺部を残すものがあり、そのままでも切截具として使用可能と考えてきたが、剥片研究の遅れている沖縄では、近年までこれらが石器か否かの判断に苦しんできた。

今回、伊是名貝塚の調査で微小石器群の存在が確認され、今後の剥片石器研究に弾みがつくものと期待している。伊是名貝塚では剥片石器と小型剥片石器が報告されている（註30・31）。前者には、石鏃、尖頭状石器、錐状石器、石匙状石器、削器、打製石斧、剥片、細片があり、後者ではクサビ形石器、石核、石鏃状石器、錐状石器、削器、Uフレイク、Uチップ、原石、ナイフ状石器など9種類の微小石器が同定されている。実に多種多様で、この種の石器は今後も増加していくだろうから、先史時代の生業の形態や自然環境への順応あるいは利用法などもより詳しく捉えられるようになるだろう。

次に南島の縄文土器あるいは文化に関する研究であるが、①知名定順による「前原式」土器の新設（註32）、②岡本孝之による「前原と荻堂伊波文化の諸問題」（註33）、③東門研治による伊礼原C遺跡の「厚手突帯文土器」（註29）、④伊藤慎二による『琉球縄文文化の基礎的研究』（註34）、⑤同じく伊藤慎二による「伊是名貝塚の土器」（註35）、⑥名護市教育委員会による大堂原貝塚出土の室川下層式に先行する無文土器の問題（註36）等々縄文文化や土器の性格あるいは枠組みに関する研究、新資料の発見報告など新しい知見が提出されている。ここでこれらの問題を取り上げるには紙数が十分でなく、別の機会に取り上げたいと思う。

IV) いわゆる「後期」の時代

さて、縄文時代に続く時代が、いわゆる沖縄編年の「新石器時代後期」で、筆者のいう「うるま時代」である。本土の弥生～平安時代にはほぼ対比される。この時代の発掘調査も歴史時代に比べると少ないが、幾つかの新しい事実が知られている。

まず、近年の大きな成果としては土器編年に関する新しい試案が提出されたことであろう。この時代の土器は変化に乏しく、長年、土器型式の設定と編年に苦慮していたが、近年、九州との対比において、ようやく型式変化の目安が得られるようになり、五型式前後の推移が推定されるようになった（註37、38、39、40）。土器編年の確立は単に土器型式の変化を確定するというだけでなく、最終的には文化変遷の目安ともなり、考古学の発展に寄与するところ大である。紙幅の都合上、ここでこれ以上深入りできないのは残念だが、先述の縄文土器の問題とともに、後日、稿を改めて取り上げることにしたい。

この時代に関するもう一つの成果は、炭化穀類の確認である。これまで、穀類の検出はグスク時代を上限として、それ以前については知られていなかったが、1992年の那覇市那崎原遺跡におけるフローテーション法の採用によって文化層の第Ⅳ層から炭化種子の検出に成功した。この第Ⅳ層からは9～10世紀と考えられる須恵器も検出され（註41）、筆者編年の後Ⅳ期に比定されている。同定された種子類は下記の通りである（註42）。

A) 栽培植物

- | | |
|---------|------------------------|
| 1. イネ | 2粒（破片1を含む） |
| 2. オオムギ | 3片 |
| 3. コムギ | 1粒 |
| 4. 麦類 | 4片（オオムギかコムギか不明） |
| 5. アワ | 2片 |
| 6. マメ科 | 完形4粒、破片17片（栽培種か野生種か不明） |

B) 野生種

- ①トウダイグサ科（コミカンソウ属、トウダイグサ属?）、②ナス科、③カヤツリグサ科、
④タデ科、⑤カタバミ科、⑥イネ科、⑦キク科?、⑧不明種子（4タイプ）

那崎原の炭化米は移入されたものか、それとも当地で栽培されたものかという問題について、発掘調査で得られた野生の炭化種子（例えばコミカンソウ、カタバミ、ホタルイ等）および本遺跡に

おける堅果類の欠如などから、農耕の行われていた可能性が高まった（註42）。当時の沖縄で農耕がどれほど普及していたか、未だ把握できる段階にないが、少なくとも一部の集落では農耕はすでに行われていたと見なくてはならない。

炭化穀類の2例目は伊江島のナガラ原東貝塚で得られている。本貝塚の発掘調査は熊本大学考古学研究室によって実施され、初年度の調査（1998年7月）で、文化層の第Ⅲ層から①イネ（穎果＝3片、粃＝17片、イネ／穎果？＝1片）のほか、②不明種子＝1片、③同定不可能種子＝9片を検出、また、コラムサンプリングで第Ⅴ層から①イネ穎果＝1片、②同定不可能種子＝1片のほか、同じくコラムサンプリングの第Ⅶ層では①イネ穎果？＝1片、②同定不可能種子＝4片が得られた（註43）。因みに、第Ⅳ層の暦年代はA.D.650yである（註44）。

ところで、グスク時代以前に属するイネの検出例は上記のように那覇市的那崎原遺跡ですでに確認されてはいるが、今回のナガラ原東貝塚における検出は那崎原以前にイネが存在していたことを示す新たな事例で、その点で重要である。その当否を判断するための確認調査が必要となった。同貝塚における発掘調査は平成11・12年と継続して実施され、植物遺体の検出については以下のような成績を得た（註45・46）。

A) 栽培植物	平成11年（1999）	平成12年（2000）
1. イネ		
穎果	1粒	7点（4粒＋3片）
粃類	40片	11点
2. コムギ		1粒
B) 野生植物		
1. タブノキの子葉	6片	1片
2. タブノキ／堅果？	12片	
C) 同定不可能な種子	79片	161片

以上のような出土状況から、遺跡内に炭化イネが普遍的に存在することが確認された。これらのイネは弥生のイネより小型らしい。また、平成12年度に行われた調査でコムギが1粒得られ、コムギも那崎原以前に存在していた可能性が高まった。このコムギも小型だという。コムギは日本本土の古墳時代中・後期では出土例が稀少で、8世紀以降に急増するらしい（註46）。ナガラ原東貝塚のコムギは本土の盛期以前に属することになり、問題を複雑にしているが、いずれにしても第Ⅳ層で穀類が確認されたことの意義は大きい。因みに、第Ⅳ層の暦年代はA.D.385～625年とA.D.430～660年の2例得られている（註47）。

ところで、第Ⅲ・Ⅳ層からは田畑の存在を示すような野生植物は検出されていない。したがって、これらのイネやコムギは当地での栽培を意味するものではなく、交易によって外部からもたらされたものと解釈されている。もし、農耕が行われていなかったとすれば、堅果類が多量出土してもい

いはずであるが、堅果類も皆無に等しい。堅果類の本遺跡における稀少性をどう理解すればいいのか。民族例としては堅果類を澱粉にして交易をした例が米国カリフォルニア州のネイティブ・アメリカンの間で知られているようで、伊江島のケースもこの種の例とみなしうるか今後の検討課題である（註43）。

以上が現在判明している栽培植物に関する資料であるが、この第Ⅳ層からは鉄片も1例採集されており、これも重要な資料である（註46）。

さて、栽培植物の次は家畜の問題である。イヌの飼育は縄文時代にかかなり普及していたとみえ、多くの遺跡から報告があり、上限も読谷村渡具知東原遺跡の爪形文土器層に遡る（註48）。今のところ、イヌ以外の飼育動物は知られていない。次の、いわゆる「新石器時代後期」の時代も家畜に関する報告は少なく、わずかにイヌがナガラ原貝塚など（註49）で報告されているが、縄文時代に比べると、そう多くはない。ここで新たに加わるのがウシとブタである。前者は伊江島阿良貝塚の第Ⅳ層（文化層）からの出土だが、詳報がなく具体的なことは分からない（註50・51）。ブタも伊江島のナガラ原貝塚から報告されている。出土層位は弥生後期で、当初九州あたりからの持ち込みと考えられていたが（註52）、久米島の北原貝塚や清水貝塚における出土例およびそれらに関する近年のDNA研究から家畜ブタの存在が明らかになった（註53）。これらのブタは東アジア世界から交易によって搬入され、かつ、飼育されたと見られている（註53）。また、同じくDNA研究から、これらの家畜ブタは縄文時代（野国貝塚や地荒原遺跡など）に遡る可能性も指摘されている（註53）。

次は周辺地域との交流・交易に関する資料を見てみたい。九州地方との交流・交易を示す遺物は最も多く、資料も年々増加している。ここでは紙幅の都合で特に外国製品に焦点をあててみたいと思うが、直接・間接の接触を示す資料は徐々に増加している。現在、報告されている資料は下記の通りである。上から古い順に列挙する（註54）。

1. 大陸系磨製石器
2. 楽浪系土器
3. 五銖銭
4. 漢式三角鋏
5. 後漢鏡
6. 開元通宝
7. 陶磁器

縄文時代の外国製品は孔列文土器や明刀銭の2種に限られていたが、この時代には上記のように種類は増加している。上記諸製品の渡来経路についてみると、大陸系磨製石器と楽浪系土器は九州経由と考えられるが（註55）、後者は九州に出土例がなく、韓国からの直接渡来も想定されている（註56）。五銖銭は沖縄における出土状況から九州経由と直接渡来の2ルートが想定されている（註57）。漢式三角鋏と後漢鏡は弥生土器と共伴しており九州経由と考えられる（註58）。開元通宝は九

州経由も否定できないが、沖縄における出土量の多さから、大部分は中国から直接伝来したものと考えられている（註59・60）。陶磁器（最古は11世紀後半ごろの白磁）の出土例は少なく、数遺跡に限られている。共伴遺物との関係から九州経由が考えられている（註61）。なお、奄美諸島を視野に入れると、そこでは中国との交渉を示す鼎形土器が得られている（註62）。

V) 先島諸島の石器時代

次に先島諸島の現況について見ていきたい。旧石器時代については沖縄諸島同様、旧石器そのものの発見がなく、考古学上の進展はほとんど見られない。しかし、新石器時代については石垣島のピューッタ遺跡で新たな土器資料が得られ、下田原式土器が従来考えられていたようにボール状の器種だけに終始せず、深鉢やコップ状の器形を含む、数種の器種からなる土器文化であることが明らかになった（註63）、久しぶりの大きな収穫である。

ところで、八重山の土器文化は系統的に沖縄諸島のものにつながらず、南方起源とされている。しかし、未だ源流はおさえられていない。その故地として至近の台湾が最も有力視されているが、台湾では未だ祖型になる土器は見つかっていない。土器が源流探索に使えないのなら石器ということになり、最近、石斧によるルーツ探しを開始したところである。

八重山地方の石斧には沖縄地方や隣国の台湾とも異なる一種独特の整形技法や形態を有するものがある。この種の石斧に対し筆者は「八重山型石斧」の呼称を与えた。八重山型石斧は平面形や断面形に関するこれまでの基礎的研究から、前者については撥型、短冊型（長短）、狭刃型の3類型があり、後者の横断面の形態については厚型、中厚型、扁平の3類型に大別できることが分かった。また、器面調整に際しては一応全面研磨を意図しつつも研磨は徹底せず、したがって調整剥離痕を随所に残す、いわば半磨製あるいは局部磨製まがいの粗っぽい製品となり、このことも八重山型石斧の大きな特徴の一つに数えられる。

次に、未だ詳細な検討を行ったわけではないが、刃部が丸ノミ状を呈するタイプも比較的多く、このことも八重山型石斧の属性の一つではなかろうかと見ている。大田原遺跡や下田原貝塚の報告書には刃部に関する平面・正面形の詳細な観察記録と図表が掲載され、利用者にとって有難い資料となっている。例えば、下田原貝塚（註64）では、第10表と第11表に刃部の正面形に関する観察結果が表示されており、正面から見て刃縁が水平方向に直線をなすもの（ア）、凸レンズ状に上方に盛り上がる弧状のもの（イ）、逆に凹レンズ状に下方に窪む弧状のもの（ウ）の3タイプに分けられている。第10表では（ア）は13点、（イ）も13点、（ウ）は7点で、弧状を一括すると20点となり、直線的刃部（ア）の2倍弱となる。また、第11表では（ア）が14点、（イ）が15点、（ウ）が1点と、ここでも弧状の刃部（16点）が直線的刃部（14点）を若干上回っている。比率からすると弧状の形態が本遺跡では優位にあるといえる。

大田原遺跡でも下田原貝塚より先に上記のような観察が行われている（註65）。幸い、綿密な実測図が多数報告書に掲載されているので、上記各種の形態を拾い上げてみた。分類に際しては筆者の観察により、少しでも弧状を呈するものは「弧状」として取り扱った。その結果、図示された73

点中、(ア) 刃縁が水平方向の直線をなすもの24点、(イ) 凸レンズ状の弧を描くもの22点、(ウ) 凹レンズ状に下方に窪む弧状のもの8点、その他分類不能のものが19点あった。上記の数字には分類にあたって私の判断ミスがあるかもしれないし、正確とは言い難いが、おおよその傾向はつかめるものと思う。つまり、丸ノミ的なものも少なくないということである。今後、この種の丸ノミ的な製品については、他の遺跡における出土例も含め、詳しく見ていきたいと思っている。また、この種の丸ノミ型石斧は先島地方に卓越する貝斧に似たところがあり、この点も気になるところである。両者の関係も今後の課題だが、もし両者間に系統関係が認められるとすれば、貝斧の出自に関し目処が得られることになる。

次に丸ノミ的刃部との関係で注目されるのが、斧の縦断面の形態である。つまり、縦断面における左右の形態がシメトリカルなのか、アシメトリカルなのかという問題である。八重山型石斧には後者が多いように見受けられる。筆者自身未だ具体的な検討を行っていないので明言は出来ないが、阿利直治氏が大田原遺跡で、この点に関し先駆的な観察を行っている（註65）。同氏の観察基準にしたがって報告書から拾い上げると、図示された73点中、①表面が弧状に盛り上がり、裏面が水平方向か若干窪むもの53点、②表面と裏面がやや平行関係にあるもの11点、③不明9点であった。図上判断のため、この数字も正確とは言い難いが、おおよその傾向は捉えられると思う。つまり、縦断面で見ると、一面（内面）はやや平坦か凹面をなし、床などの平面におくと安定した状態を示すが、他面（表面）は弧状を呈するため、ロッキングしやすい状態にあり、不安定である。このように縦断面形は左右不均衡のものが多く、阿利直治氏がかつて着目したように八重山型石斧の属性の一つに加えるべきかと考えている。

筆者はこれまで八重山型石斧の平面形および横断面形に関する基礎的分類を行ってきた。この分類は最終的到着点ではなく、叩き台的なもので、今後いろいろ修正が必要かと思うが、一応、試案を提出したので、今後は次の段階である石斧の機能面の検討に移りたいと思っている。その際、上記二つの観点も当然検討の対象になる。

ところで、話をもとの起源の問題にもどすと、現在のところ、土器も石器も祖型にあたるものが台湾では見つかっていない。台湾本島とは全く無縁なのであろうか。もし、全く無関係ということになれば、中国南部やフィリピンなど他の地域に目を転じなければならないが、台湾との関係についていえば将来の資料に未だ少し未練が残る。つまり、筆者がかつて提案したように、今後の課題としてはポイントが2つあるように思う（註66）。ただ、筆者の前回の提言には舌足らずの面があったので、ここで再説しておきたい。その一つは台湾において、現在報告されている土器文化とは別の下田原貝塚文化に近いような単純化の進行したものを発見すること。二番目は八重山において現在知られている土器文化よりさらに古い土器文化を発見すること。両者のうち、いずれでも問題解決に結びつく可能性が高いと思うが、両ポイントのうち前者については台湾考古学の成果に頼らざるを得ないものの、後者はわれわれ自身ができることであり、今後、より古い土器文化の発見を目指して努力していかななくてはならない。八重山諸島の場合も沖縄諸島のケースに似ているように思えるからである。沖縄諸島でも20数年前、伊波・荻堂式以前が全く不明だったころ、周辺地域に伊

波・荻堂式につながる文化が全く見あたらず、独自発生を考えたこともあった。1975年、読谷村渡具知東原遺跡で縄文早・前期の遺跡が発見され、謎は一気に解けた。沖縄諸島の土器文化は九州の縄文文化に由来することが分かったのである。これまで孤立的存在と見なされていた伊波・荻堂式土器はローカル化の著しく進んだものだったのである。おそらく八重山の下田原式土器文化もローカル化の著しく進行したものであって、この下田原式より何型式か古い土器に解決の糸口が秘められているのではなかろうか。

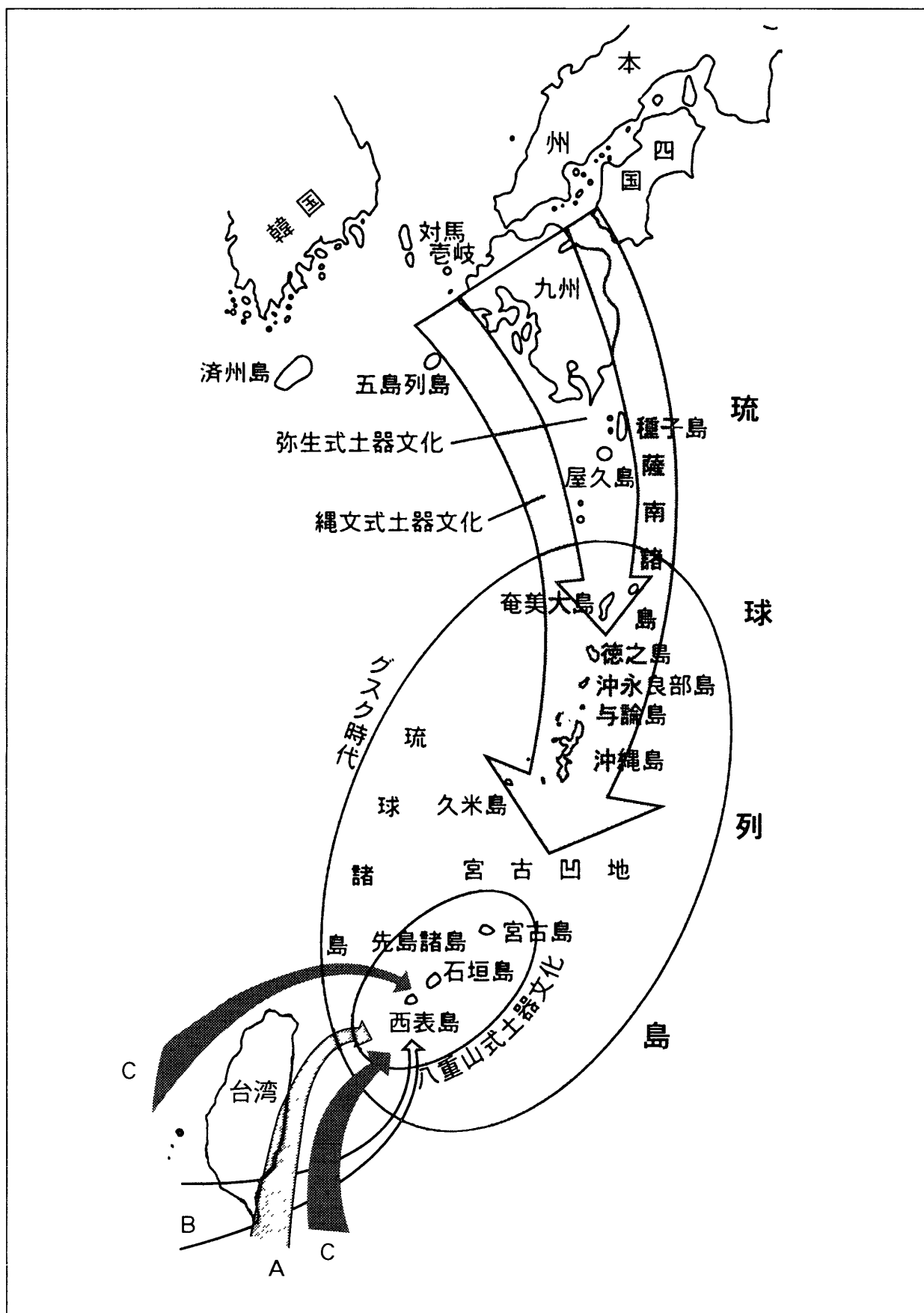
なお、八重山先史土器文化の源流については、これまで國分直一説（台湾東部海岸経由説）と大濱永亘説（台湾南部経由説）の両観点を地図上に掲げてきたが、最近、金子えりか氏の非台湾経由説（註67）を知ったので、第1図に金子説を追加した。

金子えりか氏は「・・・例えば石器の局部磨製技術は台湾西海岸中北部の大安溪の中流地区に見出されるが、その地域の伴出土器は泥質の黝黒色土器である。その他の地域では、西海岸でも東海岸でも、局部磨製石器の製造は行われていない。また貝斧の使用例は発見されていない。これらの事実、台湾を避けた流通経路があったことを示唆するように見える。したがって、台湾以外にも目を向ける必要が当然ある。」と述べている（註67）。

図中のAは國分説、Bは大浜説、Cは金子説だが、金子氏は流入ルートについて言及していない。現状では北からの波及は考え難いので、南方起源の矢印を2本、台湾を迂回するかたちで図化した。

先島地方の貝斧文化については、これまでフィリピンのパラワン島のものに形態が最も近似しているということから、同島との関連で捉えられてきた。ところが今年7月、高山純教授が先島地方の貝斧文化は周辺地域からの伝播ではなく、同諸島内で独自に発生したものであると新たに独立発生説を提出された（註68）。これまで伝播論的視点で捉えてきたのだが、高山説は従来の見解とは全く異なる新しい見解である。高山教授は同論文で、貝斧と石斧の関係を強調しておられる。私も先島地方の石斧と貝斧の間に見られる形態的類似にはかねがね気になっており、それについては本文「先島諸島の石器時代」の項（151～152頁）でも肯定的に述べたが、現在のところ漠然とした印象的見解であって、両者間に系統関係が認められるのか否かの問題については、現在進めている「八重山型石斧の基礎的研究」をすませてから着手したいと考えている。

高山論文に刺激されて、今八重山先史文化の諸相についていろいろ考えているのだが、もし高山教授と私が考えているように、石斧・貝斧間に系統関係が成立するとすれば、次に浮上するのが両者間の先後関係であろう。勿論、現時点では下田原式土器文化の後に貝斧が出現するので、石斧が貝斧に先行することになる。しかし、先行の下田原式土器文化期の石斧にも貝斧類似の特徴が見受けられる。この類似現象をどう理解すべきか、具体的なことは今後の研究に委ねるとして、現段階での思いつきを記すと、下田原式土器文化の源流が台湾にたどれない現在、先行する文化として貝斧文化が存在しなかったかどうか、本頁前段で紹介した金子えりか論文に見るルート論も気になるところである。勿論、下田原式土器文化が台湾起源の場合は別で、その場合、本文前項に記した二つの課題のうちいずれか、または両方を解決する必要がある。（2001, 2, 23日脱稿。その後、7月に一部追加、修正）。



第1図 南島における先史文化圏と文化の源流
 A. 國分直一説, B. 大瀨永亘説, C. 金子えりか説

追記 小文は去る三月末日の入札に向けて二月下旬に脱稿したが、諸般の事情で入札が八月末日に延期された。その間、三つの文献（註30,53,68）が新たに刊行され、この三篇も追加した。ただし、小文の151～152頁に記した貝斧と石斧に関する私見は高山論文刊行以前に執筆したもので、高山論文を加味して全文書き替えようかと考えたが時間的余裕がなく、末尾に追加する形となった。次回に再考したい。

【註】

1. 栗林文夫・堂込秀人『天城遺跡・下島権遺跡』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書、9、1994
2. 田村晃一・池田 治「喜子川遺跡―第3・4次発掘調査」『青山史学』14号、1995
3. 旭 慶男・牛ノ濱修『土浜ヤーヤ遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書、17、1988
4. 加藤晋平「南西諸島への旧石器文化の拡散」『地学雑誌』105-3、東京地学会、1996
5. 馬場悠男「港川人は琉球人の祖先か―島嶼適応の観点から」『琉球・東アジアの人と文化』
高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、2000
6. BABA,H.et.al "Minatogawa Man, the Oldest Type of Modern Homo sapiens in East Asia"
『第四紀研究』第30巻第3号、日本第四紀学会、1991
7. 土肥直美ほか「骨からみた沖縄先史時代人の生活」『琉球・東アジアの人と文化』
高宮廣衛先生古稀記念論集刊行会、2000
8. 鈴木 尚『骨から見た日本人のルーツ』岩波書店、1969
9. HANIHARA,K. and H.UEDA "Dentition of the Minatogawa Man" THE MINATOGAWA MAN,
The University Museum, The University of Tokyo, 1982
10. 池田次郎「下洞出土の人骨」『沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査』伊江村教育委員会、1977
11. 山口 敏「ゴヘズ洞出土の人骨について」『沖縄県伊江島ゴヘズ洞の調査（第二次概報）』
伊江村教育委員会、1978
12. 佐倉 朔「ピンザアブ出土の人骨化石」『ピンザアブ』沖縄県文化財調査報告書、第68集、
沖縄県教育委員会、1985
13. 馬場悠男『ホモ・サピエンスはどこから来たか』河出書房新社、2000
14. "Chungbuk National University Museum" Chungbuk National University,Korea, 1998
15. LEE, Yung-jo "Suyanggae Micro-blade Core Industry in Korea" INQUA 15th International
Congress, 1999,
16. 松藤和人「朝鮮半島から日本へ―剥片尖頭器の系譜」『季刊考古学』第29号、雄山閣、1989
17. 小田一幸「野国貝塚群B地点から出土した木材片の樹種について」『野国―野国貝塚群B地点
発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書 第57集、沖縄県教育委員会、1984
18. 渡辺 誠「宮城島高嶺遺跡出土の植物遺体」沖縄県文化財調査報告書第92集、『宮城島遺跡分
布調査報告』1989
19. 宮城朝光「苦増原遺跡出土の植物遺物」『苦増原遺跡』具志川市文化財調査報告書第1集、
具志川市教育委員会、1977

20. 報告書に出土炭化種子に関する表や写真は掲載されているが、同定不能のため記述を省略した
由（島袋洋氏のご教示による。2001, 8, 13)
21. 知名定順「木製品」『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999
22. 能城修一「前原遺跡出土木製品の樹種」『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999
23. 新城 恵「バーキ（竹製編み物）」『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999
24. 新城 恵「貯蔵穴」『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999
25. 大松しのぶ・辻誠一郎「前原遺跡から出土した大型植物遺体群」『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999
26. 辻誠一郎「前原遺跡の植物相と人の植物利用」『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999
27. 東門研治「キャンプ桑江北側返還地域の遺跡範囲確認調査の成果について」平成13年度
沖縄考古学会発表レジメ、7月1日
28. 「台湾材?使った器出土」『読賣新聞』2001, 5, 18
29. 東門研治「伊礼原C遺跡」『考古学ジャーナル』No.454（1月増大号）、ニューサイエンス社、
2000
30. 小田静夫「伊是名貝塚の石器」『伊是名貝塚』勉誠出版社、2001
31. 小田静夫「沖縄の剥片石器についてーチャート・黒曜石製細小石器を中心に」『琉球・東アジ
アの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論文集刊行委員会、2000
32. 知名定順「沖縄貝塚時代の土器」『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999
33. 岡本孝之「前原遺跡と荻堂伊波文化の諸問題」『前原遺跡』宜野座村教育委員会、1999
34. 伊藤慎二『琉球縄文文化の基礎的研究』株式会社ミュゼ、2000
35. 伊藤慎二「伊是名貝塚の土器」『伊是名貝塚』勉誠出版社、2001
36. 名護市教育委員会「大堂原貝塚発掘調査概報」沖縄考古学会発表レジメ、2001, 7, 1
37. 新里貴之「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』第17号、人類史研究会、
鹿児島大学考古学研究室、1999
38. 宮城弘樹「貝塚時代後期土器の研究（I）」『あじま』第8号、名護市教育委員会、1998
39. 岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充「沖縄編年後期の土器様相について」『琉球・東アジ
アの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論文集刊行委員会、2000
40. 新里貴之「スセン當式土器」『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論文集刊
行委員会、2000
41. 島 弘「第Ⅳ章 まとめ」『那崎原遺跡』那覇市文化財調査報告書第30集、那覇市教育委員
会、1996
42. 高宮広土「古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業」『那崎原遺跡』那覇市文化財
調査報告書第30集、那覇市教育委員会、1996
43. 高宮広土「ナガラ原東貝塚出土の植物遺体（1998年度）」『考古学研究室報告』第34集、
熊本大学考古学研究室、1998
44. 藤木聡「まとめ」『考古学研究室報告』第34集、熊本大学考古学研究室、1998

45. 高宮広土「ナガラ原東貝塚出土の植物遺体（1999年度）」『考古学研究室報告』第35集、
熊本大学考古学研究室、2000
46. 高宮広土「ナガラ原東貝塚出土の植物遺体（2000年度）」『考古学研究室報告』第36集、
熊本大学考古学研究室、2001
47. 谷 直子「まとめ」『考古学研究室報告』第35集、熊本大学考古学研究室、2000
48. 読谷村文化財調査報告第3集、『渡具知東原』読谷村教育委員会、1977
49. 長谷川善和「琉球列島の後期更新世～完新生の脊椎動物」『第四紀研究』18-4、日本第四期
研究会、1980
50. 沖縄県文化財調査報告書第48集、『阿良貝塚』沖縄県教育委員会、1983
51. 『伊江島阿良貝塚発掘調査報告』沖縄県教育委員会、1983
52. 松井 章「遺跡出土の動物化石が語る人類文化」化石研究会誌『特集・古琵琶湖層群の化石』
Vol.30（1）、1997
53. 松井 章・石黒直隆・本郷一美・南川雅男「琉球（沖縄）先史文化におけるブタの移入と系譜」
第4回韓・日新石器文化学術研究発表資料集、『新石器時代の貝塚と動物遺体』韓国新石器
研究会・日本九州縄文研究会、2001
54. 高宮廣衛「開元通宝から見た古代相当期の沖縄諸島」『アジアの中の沖縄』第9回アジア史学
会研究大会（沖縄大会）、同実行委員会、2000
55. 下地安広氏の教示による
56. 任孝宰教授のご教示による（1999年、那覇市で開催された「第9回アジア史学会研究大会」で
のご所見）
57. 上村俊雄「沖縄諸島出土の五珠銭」『鹿大史学』第40号、鹿児島大学、1992
58. 大城 剛「沖縄県具志川市宇堅貝塚発掘調査概要」『考古学ジャーナル』No.322、1990
59. 王 仲殊「琉球列島・奄美諸島各地出土の開元通宝に関して」『アジアの中の沖縄』第9回
アジア史学会研究大会（沖縄大会）、同実行委員会、2000
60. 木下尚子「開元通宝と夜光貝」『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論文集
刊行委員会、2000
61. 金武正紀「掘り出した遺物ー沖縄の輸入陶磁器ー」『考古学の世界』5 ぎょうせい、1993
62. 中山清美「マツノト遺跡の発掘調査」『奄美考古』4号、奄美考古学会、1996
63. 石垣市文化財発掘調査報告書第22集、『名蔵貝塚ほか発掘調査報告』石垣市教育委員会、1997
64. 金城亀信「石器」沖縄県文化財調査報告書第74集、『下田原貝塚・大泊浜貝塚』沖縄県教育委
員会、1986
65. 阿利直治「石器」石垣市文化財発掘調査報告書第4号、『大田原遺跡』石垣市教育委員会、1982
66. 高宮廣衛「八重山の先史時代」『八重山毎日新聞』1992、10、7～9
67. 金子えりか「巨石遺跡ー先島の例」比嘉政夫編『海洋文化論』凱風社、1993
68. 高山 純「先島のシャコガイ手斧はフィリピン起源か」『南島考古』第20号、沖縄考古学会、
2001

(11) 東中国海東縁における開元通宝の分布

開元通宝は西暦621～966年間に発行・流通した唐朝の貨幣である。この錢貨は質がよく、そのため人気があって唐代以後も広く流通した。開元通宝は発行国の中国だけでなく、周辺地域の、例えばタジキスタン、ウズベキスタン、アフガニスタンなど中央アジアのほか、東のモンゴル、北のシベリア、南の南沙群島でも発見され、また遠くは近東地域やアフリカ東部海岸などでも出土が知られている（註1）。

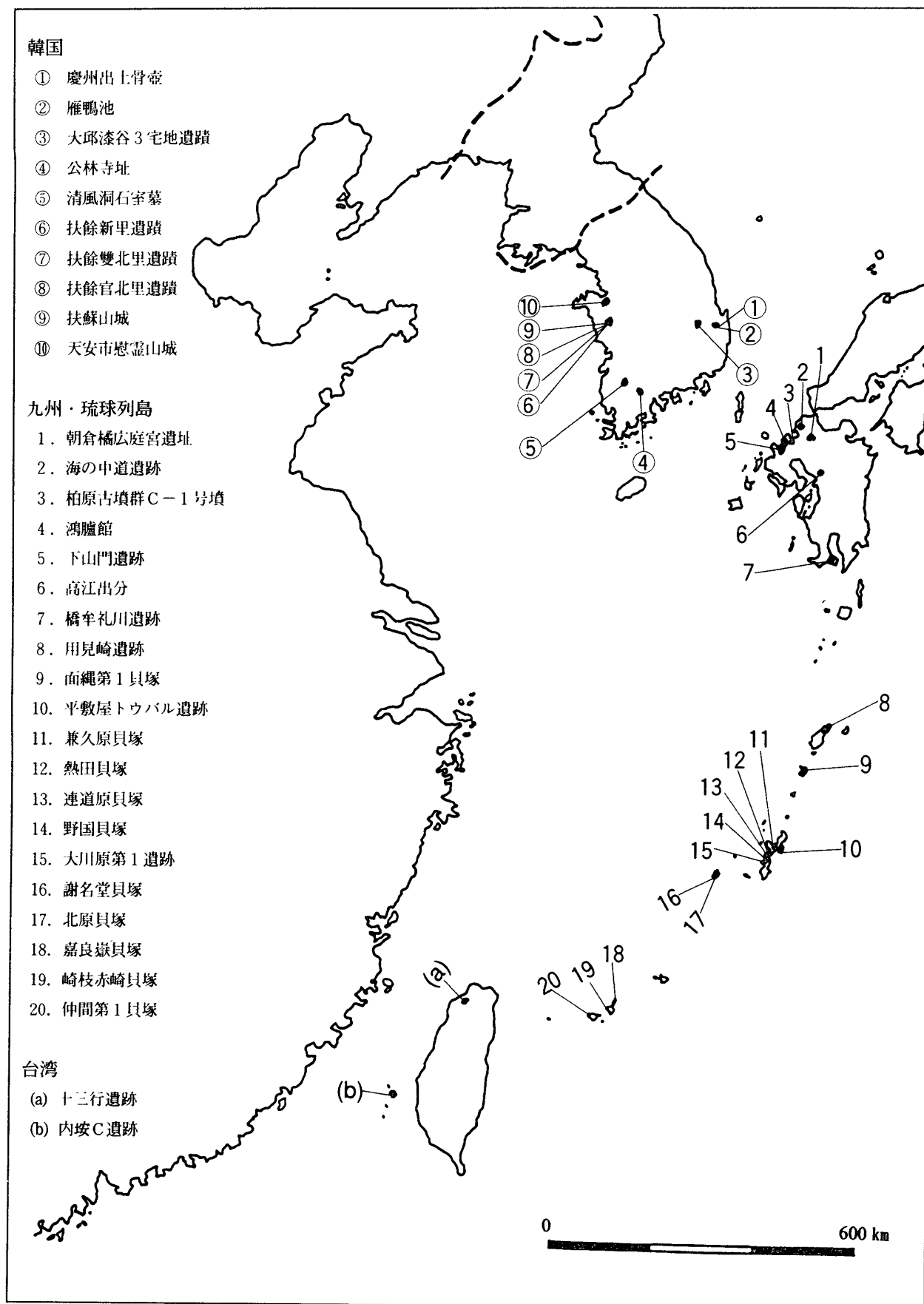
わが南島では、昭和5（1930）年に徳之島伊仙町の面縄貝塚で発見されたのが最初である（註2）。戦後の昭和34（1959）年、沖縄本島の野国貝塚でも発見され、これが沖縄における発見の嚆矢となった（註3）。以後、沖縄諸島では徐々に資料は増加し、現在では30数遺跡で発見が報告されている（註4）。これらの30数遺跡は歴史区分上概ね二つの時代に大別できる。一つはグスクなどの城跡から出土する歴史時代のもので、本土のほぼ中世に対比できる。もう一つはそれ以前、つまり古代遺跡からの出土であるが、沖縄では先史時代の終末期にあたり、実年代ではおよそ7～12世紀ごろである。小文で取り上げる開元通宝は後者、つまり先史時代終末期の開元錢である。

この時代の開元通宝は北の奄美諸島や遠くは南の先島諸島でも知られ、発見例も徐々に増加している。上記3諸島の資料を合計すると九州より出土例は多い。唐代の南島は未だ貝塚を営むような原始社会であった。何故、南島にこれほど多いのか。未だ確たる結論は出ていない。筆者は沖縄の場合、対外交渉の際の支払い手段に使用したのではなかろうかと考えている（註4・5・7）。この問題にアプローチする第一歩として、まず東中国海東縁部における出土状況を知る必要があり、その作業に着手した。

作業は奄美・沖縄・先島の3諸島から始め、次に九州における出土例を調査。その後、台湾の調査を行い（註6）、以上の成果を拙文「開元通宝と安司の出現」にまとめた（註7）。以上の諸調査により南島における出土例が他の地域に比して比較的多いという事実が浮かび上がってきた。昨年春、韓国における出土状況を調査する機会があった。韓国では開元通宝をスタンプした埴を含め10遺跡で出土を確かめることができた（註8）。以上の成果を図化したのが第1図である。

この分布図から、環東中国海地域における歴史上のどのような情報が読みとれるだろうか。当初、開元通宝の琉球諸島における分布しか知らなかった時代には貝塚を営むようなプリミティブな時代の出土資料であり、貨幣としての機能は考え難いとの観点から非貨幣的用途（例えば、耳・首・胸飾りや服飾など）のみが頭の中を支配していた。現在でも非貨幣的用途を全く否定することはできないが、第1図のような東中国海東縁における分布を見ていると、やはり当時の東中国海を取り巻く東アジアの状況が気になる。文献史学の分野では南島における開元通宝の出土を遣唐使船との関連で捉える傾向が強かった。勿論、遣唐使船も搬入者の有力な候補であることには違いない。しかし、遣唐使船と無関係な八重山地方でも開元通宝が出土するとなると、別の視点も必要となる。

歴史書によると、わが国と唐との間にはかなりの交流があったという。彼我の往来も頻繁であった。遣唐使船以外の多くの船が東中国海を東に西に、あるいは北に南に航行していたであろう。



第1図 韓国・九州・琉球列島・台湾における唐代開元通宝の出土遺跡
筆者らの分布図（註7・8）に木下論文（註10）の一部を追加

このような諸々の船の中から、何らかの理由で琉球諸島に寄港するケースがあったとしてもおかしくはない。しかし、偶然に寄港するにすれば開元通宝の出土数が多すぎる。矢張り、何らかの積極的な目的があって来島した可能性が高い。来島の目的については後でふれることにするが、王仲殊は琉球諸島発見の開元通宝を中国からの直接の伝来と見ている（註9）。木下尚子も唐との直接的接触による伝来と考えている（註10）。おそらく両者の説くとおりであろう。ただ、当時の東中国海には唐船だけでなく、新羅船や和船も航行していたであろうから、それらも視野に入れる必要がある。そうでないと全体像に欠落部分が生ずることになる。ただ、現在のところ、新羅船との接触を示す共伴資料は得られておらず、王仲殊や木下尚子がいうように寄港船の主体は中国船であったと思う。木下尚子は螺鈿の材料として当時の唐における夜光貝の需要に注目、琉球諸島における夜光貝出土遺跡と開元通宝との相関関係を指摘している（註11）。開元通宝の南島における社会的・経済的意義の解明へ向けて一歩踏み出したという印象を受ける。（2001，2月末日脱稿）

【註】

1. 王 仲殊「論漢唐時代銅錢在辺境及国外流传—從開元通宝的出土看琉球与中国在歴史上的關係」『考古』第12期、1998
2. 小原一夫「奄美大島群島徳之島貝塚に就いて」『史前学雑誌』第4巻第3—4号、昭和7年11月
3. BIRD, J. B. and EKHOLM, G. F. "Comments on the Archaeological Resources of Okinawa", American Museum of Natural History（発行年は1959年だが、明記されていない）
4. 高宮廣衛「開元通宝から見た先史終末期の沖縄」『王朝の考古学—大川清博士古稀記念論文集』雄山閣、1995
5. 高宮廣衛「開元通宝から見た古代相当期の沖縄諸島」『アジアの中の沖縄』第9回アジア史学会研究大会（沖縄大会）、同実行委員会、2000
6. 高宮廣衛・宋文薫「琉球および台湾出土の開元通宝」『南島文化』第18号、沖縄国際大学南島文化研究所、1996
7. 高宮廣衛「開元通宝と按司の出現」『南島文化』第19号、沖縄国際大学南島文化研究所、1997
8. 高宮廣衛・任孝宰「韓国における百済・統一新羅時代遺蹟出土の開元通宝」『社会文化研究』第4巻第1号、沖縄国際大学社会文化研究会、2000
9. 王 仲殊「琉球列島・奄美大島各地出土の開元通宝に関して」『アジアの中の沖縄』第9回アジア史学会研究大会（沖縄大会）、同実行委員会、2000
10. 木下尚子「錢貨から見た琉球列島の交流史」『古代文化』第52巻第3号、古代文化協会、2000
11. 木下尚子「開元通宝と夜光貝」『琉球・東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古稀記念論集、同実行委員会、2000